

日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL.03-3503-2722 <http://www.jnpc.or.jp/>



凶行 なぜ

11月13日夜、フランス・パリで同時多発テロが発生した。現場に近いレピュブリック広場には市民の追悼メッセージが描かれていた=11月16日 撮影：大西 正純(産経新聞社写真報道局)

今月のことば

「中国人の8割が、(大気汚染は問題だが)気候変動は深刻ではないと答える」
ストークス・ピュリー・リサーチセンター 国際経済世論調査部ディレクター(11・17) 13頁

「気温上昇を抑えるため、経済開発の在り方や生活習慣を大きく変える必要がある。先進国はイノベーションで対応できるが、新興国は財政支援がなければできない」
ダナ・駐日フランス大使(11・18) 15頁

2月は宮城・岩手県に復興取材団を出そうと調整中だ。クラブの会見には知事や地元の市町村長はもちろん、被災者の身近で活動する企業社長、研究者やNGO 専門家らを幅広く招きたい。この会報でも特集記事を組む。ご意見をお寄せください。

(中井良則)

福島原発に取材団 1月
「3・11」5年 企画幅広く

新聞・テレビは節目の年を大事にする。今年は戦後70年報道に力を注いだ。来年、日本と世界のメディアが注目するのは「3・11」5年だろう。東日本大震災と福島原発事故のあの日を境に、もの見方が変わったと話す人は多い。ただ、世の中の仕組みや動き方が一変したようには、今のところ見えてこない。

日本記者クラブも「5年」に取り組む。企画委員会は幹事団を作り、プログラムを検討してきた。各社に募集案内を送るが、1月下旬には東電福島第一原発に現地取材団を派遣する。14年1月に続き2回目となる。多くの記者が参加できるよう、原発構内取材日を1月25日と27日の2班に分け、26日は合同で周辺市町村を取材する。

戦後70年、メディアの将来 重層的、多角的に掘り下げた1年

企画委員長 西村 陽一

シャルリ・エブド襲撃で始まり、同じパリの同時多発テロで幕を閉じようとしているこの1年は、後世、世界史の大きな節目として記憶されるだろう。同じように日本でも、戦後70年の今年は、「安保」や「歴史」の観点から重要な転換の年として記録されるに違いない。

日本記者クラブはそんな問題意識から多くの情報や視点を発信してきた。記録的な323人もの出席者を集めた村山富市元首相と河野洋平元官房長官の共同記者会見（6月9日）を筆頭に、会見や研究会は211回（11月末現在）を数えた。

私は戦後50年をモスクワで、戦後60年をワシントンで迎えた。「50年」の世界は時代の裂け目からむき出しの民族の顔が見えたところであり、そんなニュースの1つとして追いかけたクリミア情勢は今、ウクライナ危機として欧州を揺さぶっている。「60年」前後のワシントンではイラ

ク戦争の失敗が大ニュースだったが、当時のイラクの混乱が世界を揺るがす「イスラム国」につながった。その意味で「70年」は世界の大きな流れの通過点に過ぎない。

ただ、メディアの仕事は歴史の秒針を刻むとともに、歴史の証言を記録し検証することであり、70年という時の長さを考えれば「証言者」「目撃者」の話を直接聞ける機会が減っていくのは避けられない。グローバル化の反動なのか、歴史が「直視」や「克服」の対象というよりは、国家間、民族間のアイデンティティ競争の様相を呈しているように感じるときがある。その意味でも、当クラブが戦後70年に焦点をあてた企画をさまざまなに繰り広げたことは大いに意義のある取り組みだった。

ドイツとイスラエルに派遣した取材団は、両国の和解がなぜ可能だったのか、答えを求め20人を超える人にインタビューした。取材団の1人



マーク・トンブソン・ニューヨークタイムズ社長
会見(9.25)を司会する西村企画委員長

は帰国後、冷徹な国益観を踏まえた国家の実利と、一人ひとりが記憶と責任を考えると、個人の内面の意識の2つが歴史をつくるのではないかと語っている。

戦後70年をどう伝えるかというテーマでは、全国の若手・中堅記者を集めた研修会と沖繩取材団を企画した。一連の試みは、クラブ発の情報発信、国内外への取材団派遣、全国の記者の研修と交流という3つを重層的に組み合わせたものだった。

メディアの将来についても、これまで以上に深く掘り下げた企画が目白押しだった。デジタル版有料購読者が100万人を超えたニューヨーク・タイムズのトンブソン社長は自らのiPhoneをかざして、こう

語った。

「多くの記者はこうした端末で写真を撮り、テキストをシェアし、それを仕事で使っている。ジャーナリストは愚かではない。世の中の変化は十分に理解している。BBCやNYTの記者も未来を信じていたい」と真剣に思っているからこそ、自分が変わらなければならぬことが分かっている。業界も変化しなければ存亡の危機を迎える」

トンブソン氏がもう1つ強調したことがある。「記者に求める基準は全く変わっていない。常に一番レベルの高い、世界一質の高い記事を書いてくれるジャーナリストを求めたい。これは変わらない」

第3期に入った記者ゼミでも次世代ジャーナリズムのテクノロジーを取り上げる一方で、講師のこんな指摘があった。「ジャーナリズムの真価は情報を発掘する足であり、データや情報を深く解説する頭である」

日米の発言に共通しているのは、ジャーナリズムが大切にすべき不変・普遍的価値と、メディアとして大胆に変わらなければならないという精神である。クラブの来年の活動は、ここも踏まえて考えたいと思う。

(にしむら・よういち 朝日新聞常務
取締役)

年末企画 わたしのおすすめ本2015	4・5
中国取材回報告	6・9
クラブゲスト 奥野誠亮・元法相／不破哲三・前日本共産党委員長／市川雄一・公明党特別顧問	10
ザンスー・ベナン首相／ハンス＝ヨゼフ・フェル・独エナジー・ウオッチ・グループ代表／河野太郎・国家公安・行革・防災担当相	11
鈴木英敬・三重県知事／小倉和夫・日本財団パラリンピックサポートセンター理事長／日本再建イニシアティブ	12
モチヅキ・米ジョージ・ワシントン大教授、橋本晃和・桜美林大大学院特任教授／松元剛・琉球新報編集局次長／ストークス・ビュー・リサーチセンター国際経済世論調査部ディレクター	13
トン・米首席国務次官補代理／グテレス・国連難民高等弁務官／鈴木大地・スポーツ庁長官	14
ダナ・駐日フランス大使／加藤勝信・1億総活躍・拉致問題相	15
里山・里海ツアーに参加して	16
戦後70年 あの会見 このことば	17
記者ゼミ 次世代ジャーナリズムの現場	18
ワーキングプレス パリ同時多発テロ	19・21
朝日新聞社 国末憲人 中台首脳会談 共同通信社 鈴木雄士 大阪ダブル選 毎日放送 奥田信幸	
被災地通信 福島県浪江町 全町避難地域の選挙戦	22
福島民報社 伊東一浩	
リレーエッセー 資本主義を考え抜いた経営者 クロネコヤマトの小倉昌男さん 永野健二	23
書いた話書かなかった話 男女雇用均等、共同参画 「女性」を書き続けた記者生活	24・25
鹿嶋 敬	
試写会 放浪の画家 ピロスマニ	26
東京新聞 深田 実 海難1890 朝日新聞社 真田正明	
マイBOOKマイPR／寄贈書	27

「連携」「速報」「詳報」で発信強化 サイトの会見リポート欄を改革 会報は1月号から紙面刷新

日本記者クラブが主催する記者会
見の報告記事は、毎月発行するクラ
ブ会報と、連日更新するウェブサイ
トの2つのメディアで発信してい
る。会報委員会はさらに読まれる発
信の在り方について3カ月、議論を
続け、12月のゲストから新しい掲載
方法に切り替えることを決めた。

サイトはすでに変更したので「会
見リポート」が長くなったと気づい
た方がいるかもしれない。会報は来
年1月号から紙面を刷新する。キー
ワードは「連携」「速報」「詳報」だ。

会報委員会の議論の出発点は、①
ネット時代に対応し、クラブのサイ
トをどう充実するか②クラブの会見

が増え続け、年230件を越す中、
限られたページしかない紙の会報と
スペースが豊かに使えるサイトをど
う調和させるか——といった問題意
識だった。

紙優先からウェブ・ファーストへ

これまでの編集は、会報今月号の
「クラブゲスト」欄をご覧いただけ
ればわかるように、基本的に全ての
ゲストを同じ行数で取り上げ、重要
会見はやや大きく扱うようにしてき
た。原稿は会見取材した各社の記
者やOB会員に頼んでいる。サイ
トの「会見リポート」欄には会報と同

じ原稿を掲載している。以前は会報
発行日まで待っていたが、最近は一
稿すればできるだけ早くアップして
いる。紙媒体優先の編集だった、と
もいえる。

今回の改革は「ウェブ・ファース
ト」を採用入れた。会報では扱いを
そろえるため字数に縛りがあつた
が、ウェブならこだわらなければならない。
筆者には自由に書いてもらえらる
で、結果として長めの記事になるだ
ろう。また、サイトへのアップは会
見翌々日を原則とし、すぐに投稿し
てもらおう。速報と詳報が実現する。

「紙とネットの特性は」

世界中の新聞と同じ悩み

では、会報はどう変えるか。毎月
開く会報委員会です、9、10、11月と議
論を重ねたのは、世界中の新聞社が

悩んでいるテーマでもあった。つま
り「紙とネットの違う特性を生か
し、連携しながら、ニュースをどう
提供するか」という難問だ。

1月号から会報のクラブゲスト欄
はなくなる。新たに「ゲスト一覽」
のページを設け、毎月のゲスト全員
を写真付きでコンパクトに紹介す
る。1ページには10人前後を掲載で
きるだろう。サイトと同じ名前の
「会見リポート」欄を作り、重要ゲ
ストや関心の高いテーマを選んで、
サイトにアップ済みの長めの原稿を
載せる。大物ゲストなら1ページ全
てを使う場合もあるだろう。

この方法だと「ゲスト一覽」に登
場するだけの会見もある。その会見
リポートはすでにサイトに載ってい
るのでそちらを読んでください、と
お願いすることになる。

かくして①サイトと紙のすみ分け
と共通のコンテンツ提供を進める
「連携」②サイトの特性を生かした
「速報」③サイトでも紙でも読める
「詳報」——がキーワードとなる。と
はいえ「臨機応変」が4つめのキー
ワード。まずは1月号を作り、読者
の反応や注文を聞きながら、発信強
化をめざしたい。来年はウェブサイ
トの全面リニューアルにも取り組む
予定だ。
(専務理事 中井良則)

わたしのおすすめ本 2015



毎年12月号恒例のおすすめ本紹介。今年は地方紙・地方局の編集・報道局長の皆さんからお寄せいただきました。それぞれの地元にもつわる本も登場します。年末年始休みの読書の参考にいかがでしょうか。

- ①第3の案 成功者の選択 (ステイブ・R・コヴィー著/キングベアー出版)
- ②最弱球団 高橋ユニオンズ青春記 (長谷川晶一著/彩図社)
- ③樹は語る 芽生え・熊棚・空飛ぶ果実 (清和研二著/築地書館)

①「困難に直面した際、二者択一の考え方は対立か妥協で終わる。どちらでもない新たな案の創出」が最善の解決策という。難しい。が、安易な妥協に走りがちな自分を戒めた一冊。②かつて3年間だけ存在したパ・リーグ球団の物語。生まれる前の話だが、子供時分なぜか興味を持ったことを思い出し、手に。読んでスッキリ。③北海道でもよく見る樹木を紹介。専門書的で多少マニアックだが、時々の森散策の楽しさを広げてくれた。
札幌テレビ放送取締役報道局長 萬谷慎太郎

①東北・蝦夷の魂 (高橋克彦著/現代書館)

②セレンディピティと近代医学 (モートン・マイヤーズ著、小林力訳/中公文庫)

③あの日から 東日本大震災鎮魂 岩手県出身作家短編集 (道又力編/岩手日報社)

①盛岡在住の直木賞作家・高橋克彦氏が東日本大震災から立ち上がるうとする東北人の気質を独自の歴史観で描いた。勝者のみが歴史を残すと言われる中、幾度となく中央の収奪に見舞われた蝦夷の魂、「和」の精神の成り立ちをひもといた。食料、資源、兵力、労働力の供給地として蹂躪され続けても、自分より他人を思いやる姿はなぜ燃え尽きることはないのか。復興に向かう今、蝦夷のDNA「反骨心に、思わず「そうだ」と叫びたくなる。

岩手日報編集局長 川村 公司

①日光鱒釣紳士物語 (福田和美著/山と溪谷社)

②芥川賞の謎を解く (鶴岡哲夫著/文春新書)

③おばあさんのしんぶん (松本春野文・絵、岩國哲人原作/講談社)

①は地元では知られた名著。明治期からの奥日光と西洋人の釣りの関わり、時とともに中禅寺湖がアングラーの聖地となっていくさまが描かれ、感嘆する。②は今年話題となった芥川賞の「まつわる本」。大手紙の論評で知られる筆者が初回選考会から1400本の全選評を読破し、舞台裏をひもといた。③は絵本だが、岩國さんの幼年時の自伝エッセー。読後に涙が出そうになる。活字離れをあれこれ言うより、新聞というもののありがたみが分かる。

下野新聞役員待遇編集局長 坂本 裕一

①あの戦争から遠く離れて 私につながる歴史をたどる旅 (城戸久枝著/文春文庫)

②戦う石橋湛山 (半藤一利著/中公文庫)

③定訳 菊と刀―日本文化の型 (ルース・ベネディクト著、長谷川松治訳/社会思想社)

「戦後70年」を深く考えることができた3冊。①中国残留孤児だった父の半生を旧満州に追い続けた旅の記録。浅薄な嫌中、嫌韓本があふれる中で、2つの祖国と自らの運命を考え抜いた本。ずしりと重い。②越後・長岡に育った半藤氏が、戦争の時代にもリベラルな論陣を貫いた湛山を描いたもの。同郷の先達に言論人としての覚悟を問われた気がした。③三十数年ぶりに読み直した。「空気を読む同調社会」の根拠が指摘されている。

新潟日報執行役員編集局長 佐藤 明

①チェルノブイリの祈り 未来の物語

(スベトラーナ・アレクシエービッチ著、松本妙子訳／岩波現代文庫)

②原爆供養塔 忘れられた遺骨の70年

(堀川恵子著／文藝春秋)

③きょうは、おおかみ

(キョウ・マクレア文、イザベル・アーセノー絵、小島明子訳／きじとら出版)

広島ゆかりの女性3人の奮闘に圧倒された1年だった。①大勢のハルキストを「仕方ない」と諦めさせた力作の1つ。いち早く世に広めた翻訳者の松本妙子さんは私と同郷であり、周囲に自慢しながら再読。②広島のテレビ局を退職し、フリーになってからの著者の活躍は皆さんご存じの通り。取材の突破力に今回も舌を巻いた。③版元は、この絵本を訳した小島明子さんが広島市内で営む「ひとり出版社」。その眼力と熱意に脱帽。

中国新聞執行役員編集局長 江種 則貴

①あしたから出版社

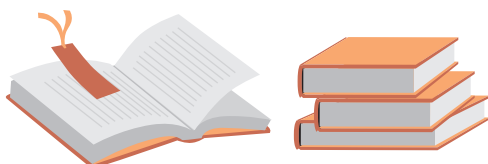
(島田潤一郎著／晶文社)

②星を撒いた街(上林暁著／夏葉社)

③昔日の客(関口良雄著／夏葉社)

①は小説家への夢破れ、就職にも失敗した高知県室戸市出身の筆者が31歳で一念発起。1人出版社「夏葉社」を立ち上げ、埋もれた名作の掘り起こしに乗り出す自伝的エッセー。②③はその夏葉社が復刊した2冊。上林暁は高知県黒潮町出身の私小説作家で、芥川賞作家の又吉直樹さんがファンを公言するなど、復刊を機に再評価の声が高まっている。本の魅力とは、出版の良心とは何かを問いかける、読書好きにはたまらない3冊である。

高知新聞編集局長 松岡 和也



①残夢の骸 満州国演義9 (船戸与一著／新潮社)
②『サウンド・オブ・ミュージック』の秘密 (瀬川裕司著／平凡社新書)
③ドラゴンズ背番号ものがたり

(鶴田真也著／中日新聞社)

①執筆10年。全9巻を完結上梓した直後に逝った故・船戸与一さん畢生の大作。大戦前後の満州国を舞台に4兄弟の生き様を描く。戦後70年のタイミングで、全巻読破に感慨。いつか映像ドラマ化してほしい大河小説。
②かつて海外特派員として駐在したオーストリア。地元では今ひとつ不人気な映画だが、私にとっては生涯ベスト1。その魅力満載。
③2016年は球団創設80周年の記念年。温故知新：歴史を知って新たな熱烈応援を！

CBCテレビ報道局長 北辻 利寿

①治さなくてよい認知症 (上田論著／日本評論社)
②紙の動物園 (ケン・リュウ著、古沢嘉通編・訳／早川書房)

③ニッポン景観論

(アレックス・カー著／集英社新書)

①「治さず、病を持ちながらも人間らしく、本人に生活の張り合いを持たせる」という筆者のメッセージは認知症そのものの考え方を根本的に変えてしまう。認知症治療方法に一石を投じた1冊。②本屋で偶然出会った。「今さらSFなんて…」と思いつつ、ゲイグイと引き込まれた作品。少し切ない大人の童話短編集。③何だかへんな日本の景観を鋭く指摘。無秩序な開発を批判しつつ、あるべき日本の姿へのヒントが詰まっている。

朝日放送報道局長 大島 尚

①ベトナム 戦争と平和 (石川文洋著／岩波新書)
②記者は死んだか! (小田橋弘之著／晩聲社)
③日本はなぜ米軍をもてなすのか (渡辺豪著／旬報社)

(渡辺豪著／旬報社)

①どの時代にも正しい戦争はない。きれいな戦争もない。一枚一枚の写真が訴えるのは過去にとどまらない。被写体は明日の私たちかもしれないのだ。戦争の足音が近づく中、子供たちとめくりたい。②1996年発行。報道に携わる者として座標軸を確認したい時に本棚から取り出す1冊。記者の原点を教えてくれる。③沖縄で基地担当記者をしていた著者が対米従属国家の姿をあぶりだす。戦後史から今が見える。沖縄から日本が見える。

沖縄タイムス取締役編集局長 武富 和彦

第14回海外取材団（11・8～14） 日中関係、北京冬季五輪開催、四川大地震復興

中国という巨大な取材対象と格闘を続けて4半世紀になるが、訪れるたびに何か発見がある。今回、取材団が訪れた場所はバラエティーに富んでいたが、どこでも認識を新たにさせられる話を見聞きすることができた。北京から四川省へと続いた旅のハイライトをご紹介します。

盧溝橋の中国人民抗日戦争記念館を参観した際、70周年記念展より10月から始まった台湾での抗日史を伝える特別展に関心を持った。前日（11月7日）に歴史的な中台首脳会談が開催されたばかり。台湾を接収した記念日に合わせた開催というのが公式説明だったが、どこかで連動しているのではという疑問も残った。

中国政府も民間と連動して進めるパブリック・ディプロマシーの必要性を感じているのだろう。3年前に発足した中国公共外交協会での座談会にはメディア、学者、ネット企業幹部、中国語普及事業を進める孔子学院の幹部らが参加し、予定時間を大幅に超えて議論が続いた。

教育も取材テーマの1つで、外国人留学生を受け入れている北京の第

39中学校（日本の中学、高校に当たる6年制）を訪問した。寄宿舎で生活する国際部の学生60人のうち韓国が25人、インドネシア17人、タイ8人で日本人はゼロ。この数字に中国との心理的な距離感の違いを感じた。

2008年の北京夏季五輪で水泳競技に使用され、22年の北京冬季五輪でもカーリングの会場となるウオーターキューブ（水立方）を見学した際は、ネット通販最大手のアリババ関係者が11月11日の「独身の日」セールの前夜祭の準備に追われていた。

中国のテレビで前夜祭の生中継を見たが、アリババの総帥、馬雲（ジャック・マー）氏がジエームズ・ポンド役で知られるダニエル・クレイグ氏と笑顔を振りまいていた。セールの総売り上げは1兆7600億円に達し、株バブル

多様な中国、認識新たに 対日改善への意欲も実感

団長 坂東 賢治（毎日新聞専門編集委員）

崩壊だけではない中国経済の一面を見た気がした。

四川省では08年の四川大地震の復興状況視察がメインテーマだった。中央政府が巨額の復興資金を注ぎ込んだこともあり、かつては省都・成都から5、6時間かかった震央の映秀鎮まで高速道路で2時間足らずで結ばれている。

数千人が死亡した鎮の中心部には立派な新街区が作られ、被災者が観光用の旅館や食堂などを経営していた。地震体験のアトラクションまであり、日本人とは感覚が違うが、「生き残ったものの生活も大事だ」という地元幹部の言葉にもリアリティーがあった。

当初、中国側に要請していた要人の会見が実現できなかったのは残念だったが、外務省幹部との夕食会や意見交換の場が設定された。中国側の対応や発言の端々から対日関係改善の意欲が感じられたことを付け加えておきたい。



映秀鎮の当時の様子を見学できる。震源地・四川大地震の瀘口中学校跡。遺構のまま保存し、

■日程（6泊7日）

11月8日（日）午前羽田発、午後北京着▼中国人民抗日戦争記念館（盧溝橋記念館）見学・張栓中・接待組組長兼ガイド組長による説明
11月9日（月）中国公共外交協会会館訪問 龔建忠副会長と会見▼座談会・中国側出席者 胡志平・国家漢弁副主任、陽伯江・中国社会科学院（孔子学院）日本研究所副所長、石丁・環球網副編集長、何申權・環球時報副編集長、劉洋・環球時報要聞部副主任、姜英敏・北京師範大学研究員、伊迪・完美世界（ネット企業，Hello World）副社長（於：中国公共外交協会会館）▼北京市第39中学校訪問（同市西城区）・左福林校長代理・国際部主任。外国人留学生受け入れの状況、態勢、成果などを聞く。留学生へのインタビューも。▼外交部アジア司（外務省アジア局）との夕食会・中国側出席者 陳海副司長、張沛霖・同司東北アジア部副部長ほか
11月10日（火）2022年冬季五輪予定会場（鳥の巣、水立方）見学と説明▼環球網訪問・石丁副編集長らへのインタビュー
11月11日（水）劉晋・外交部新聞司副司長会見▼午後、四川省成都市へ移動▼四川省外字弁公室との夕食会・肖永剛・同室副主任ほか

林立する大規模な巨大ビル群と最新鋭の車で溢れかえる道路、今回訪れた北京と成都のいずれの都市でも、想像していたよりはるかに近代化が進んでいるという印象を受けた。

GDPの成長率が7%前後でやや一息ついた感があるといわれるが、建設ラッシュは続き、町では制御できないほどの輸入車が走っている。これは、かつてない「社会主義」の下で「市場経済」を発展させた国の勢いなのだろう。

大規模な巨大ビル群を政府の号令一下で建設する「社会主義的」色彩と、「豊かになれる者から豊かになれ」と始まった市場経済が合致した成果を大都市では実感した。都市部では、欧米のブランドショップが軒を連ね、人々はセンスの良いファッションに身をまとい、好きなものを買ひ、好きなものを食べる、(限定的かもしれないが)そんな自由を満喫している様子もうかがえた。

その一方で、経済成長に裏打ちされて自身を取り戻した中国が、「世界の中心は中国である」という「中華思想」に基づき「中国を中心とした国

目覚ましい「社会主義市場経済」そして中国スタンダード

副団長 小野木昌史 (NHK報道局編集主幹)



外交部入り口のロビーで。劉晋・新聞司副司長(前列、左から5番目)らと記念撮影

際ルール」を世界に認めさせようという意欲を、外交部や中国公共外交協会幹部の話から感じた。現在、アメリカと並び立つ中で、中国は自分たちのスタンダードを全面的に押し出し、新しいルールで欧米に対峙しようとしている。

文化面でも「孔子学院」を通じて自分たちの文化を世界に広めることに努力し、国内では海外の中学・高校の留学生を積極的に受け入れて大学にも進学させている。取材団は、北京市第39中学国際部を訪問しインドネシア、タイ、韓国などから来ている生徒にインタビューした。



08年北京五輪でメイン会場となった「鳥の巣」。22年冬季五輪でも開幕式が行われる。取材団がいるのは今年の世界陸上で習近平国家主席が開幕宣言をした場所



北京市第39中学校「道徳」の授業が終わったばかりの1年生に、九州朝日放送の諫山記者がマイクを向ける

さらに、3年前に立ち上げた公共外交協会では自国のイメージアップを図るなど、幹部層は新たな中国像を作ることに熱心に取り組んでいた。今回の7日間の旅を通して、名実ともに世界のトップとしての地位を固めながら、その影響力を強めようとする中国のアグレッシブな姿を見ることができた。

11月12日(木)四川大地震関連取材…都江堰九龍新農村地区見学…地元住民へのインタビュー▼汶川県映秀鎮被災地の新住宅地、震災遺構(漩渦中学校跡)、震災記念館見学、住民へのインタビュー

11月13日(金)成都パンダ繁殖研究基地見学▼三星堆博物館(成都市広西市)見学▼川劇変面演出鑑賞、役者へのインタビュー

11月14日(土)午前成都発、午後成田着 解散

参加者

坂東賢治(団長・毎日新聞社) / 小野木昌史(副団長・NHK) / 鬼原民幸(朝日新聞社) / 遠藤弦(読売新聞社) / 吉永亜希子(同) / 浜中伸之(同) / 中澤克二(日本経済新聞社) / 原川貴郎(産経新聞社) / 花田仁美(共同通信社) / 実松充洋(北海道新聞社) / 千野雅樹(信濃毎日新聞社) / 高橋俊啓(熊本日日新聞社) / 岩下省吾(上毛新聞社) / 諫山建太郎(九州朝日放送) / 鈴木愛(日本新聞協会) / 土生修一(日本記者クラブ事務局) / 石川洋(同企画担当部長) / 村上直人(同企画担当)

【日中関係】

●「基本姿勢」逸脱せずが鉄則か

今回、多くの外交関係の要人と会うことができた。北京の中国公共外交協会では、中国外務省OBの龔建忠副会長と。その外務省では、記者会見や外国メディア対応を担う新聞局の劉晋副局長らと会談した。

彼らの言葉に共通していたのは、中国政府の「基本姿勢」を決して逸脱しないことだ。普段聞けない「本音」を引き出そうとするわれわれの質問に、原理原則ばかりが返ってきた。まあ、当たり前ではあるが……。

永田町で取材していたころ、日本の政治家たちは「オフレコだぞ」と言っていて、よく愚痴るように「本音」を吐き出した。龔さんや劉さんとそんな関係を築きたい。そう思った。

朝日新聞国際報道部 鬼原 民幸

●残念だった中国のワンボイス

中国流のパブリック・ディプロマシーなのだろう。中国公共外交協会での座談会で、私は中国が経済連携をどう進めるべきかと考えるか尋ねた。ナマの声を聞きたいと思ったが、ジャーナリストと企業の副社長は異口同音に「日中韓FTAの早期締結を望む」という趣旨を語った。政府の公式見解と変わらない。これでは議論は深まらない。残念だった。

成都でスターバックスに立ち寄りたら、笑顔の店員から日本語で話しかけられた。彼は「自分のために日本語を勉強している」と語っていた。市井の人のさりげない親切に好感を抱いた。こうした交流を大切にしたい。

読売新聞論説委員 遠藤 弦

●いつまで歴史が日中関係を規定？

北京で会見した中国外務省幹部は「歴史問題は中日間の政治の基盤だ」と繰り返し、外務省OBの中国公共外交協会副会長も「歴史の直視」が大事だとたつぷり説いた。言うまでもなく過去の教訓に学ぶことは大切だが、戦後生まれの世代だけになっていく今後、日中関係はいつまで歴史に規定され続けるのだろうか。中国が歴史にこだわる限り、両国民の感情は負の影響を受けるが、対日関係で道義的な優位を手にする歴史という武器を中国が手放すとも思えない。

中国とは決定的な対立を避けつつ、淡々と付き合えばよいのではないか。現・元外交官2人の発言を聞いて、あらためてこう考えた。

産経新聞外信部 原川 貴郎

●本音の議論、継続を

初の日本記者クラブ訪中団の受け入れは、中国の対日姿勢の変化を映

していた。ホスト役はパブリック・ディプロマシーを担う中国公共外交協会。民間をうたうが、多くの人材が中国外務省から派遣されている。

中国は南シナ海などで周辺国と摩擦を引き起こしている。同協会が主催した訪中団との座談会には中国紙、環球時報の編集者、孔子学院の関係者らが出席。中国の実情がそれなりに見えた。先方の努力を評価したい。だが、まだまだ不十分である。日中双方は今後、官製色を薄め、率直な議論ができるさまざまな場を作らねばならない。本音の議論の継続こそが日中の衝突を防ぐ最良の手段になる。

日本経済新聞編集委員兼論説委員

中澤 克二

【2020冬季五輪】

●初の夏冬開催 北京の息遣い

世界で初めて夏、冬の五輪開催都市となる北京の息遣いを感じた。「こんなに早く2回目の五輪ができることは」と、2008年夏季五輪で使った競技場を案内してくれた公務員は実感を含めた。22年の本番までに屋内スピードスケート場を新設し、スキー会場（河北省張家口）まで結ぶ新幹線を開通させる必要があるが、「計画的に進むはず」とも。

日本の冬季五輪最多メダル数は長野大会の10個だが、冬季スポーツが

それほど盛んではないらしい中国はメダル11個を2度獲得。夏の北京大会で大量100人のメダリストを誕生させた底力が冬にも発揮されるのか、楽しみで仕方ない。

北海道新聞東京支社報道センター

実松 充洋

●市民の関心はまだ薄く

「22年五輪への市民の関心はまだ08年の時ほど高くない」。北京のインターネット情報配信会社、環球網の幹部は、そう指摘した。ウインタースポーツが国内で、あまり盛んではないことに加え、夏季大会からわずか7年で招致のインパクトも薄く、市民の盛り上がりはいまひとつのようだ。

五輪の準備を担う北京五輪都市発展促進会は「施設の再利用」を強調した。北京国家体育場、通称「鳥の巣」は08年と同様に閉幕の式典で活用、北京国家水泳センター、同「ウォーターキューブ」はカーリング会場になる。08年に使った12施設のうち、11施設を活用、新規建設はスピードスケート会場だけという。

上毛新聞運動部長 岩下 省吾

【四川大地震】

●スピード復興と防災意識のかけ離

震源地の四川省汶川県では、被災地とは思えない3階建ての真新しい

建物が並んでいた。太い柱に支えられた飲食店や鉄筋の新築家屋を前に、住民や政府関係者らは、「マグニチュード8の地震でも建物は大丈夫だ」と口をそろえる。地震発生からわずか2年ほどでスピード復興を成し遂げた自信なのだろうか。逆に、防災の意識を感じることはできなかった。

四川大地震は主要な活断層3本（計約300キロ）が動いて発生したが、まだ動いていない主要断層もあるという。周辺では2013年にも大地震があった。教訓として残された倒壊建物を見ながら、日本でも防災意識を持ち続ける大切さを紙面で伝えなければと感じた。

読売新聞大阪本社科学医療部

浜中 伸之

●倒壊した校舎を観光資源に

死者約7万人、行方不明者約1万8千人を出した四川大地震被災地の今に関心があった。倒壊したままの中学校校舎。案内役の女性の「観光産業のためには何かを残さないといいけない」との言葉が印象に残った。

約20年ぶりに訪れた中国は世界第2位の経済大国としての存在感を感じさせる一方、都市部と農村部の格差の広がりも垣間見た。自分の目で見て感じたことを足元に置き換え、

日々の取材に生かしていきたい。

信濃毎日新聞報道部 千野 雅樹

●隔世の感 「最悪」から改善へ

2009年から3年間、特派員として北京で過ごした。「打倒、小日本!」。尖閣諸島沖での中国漁船衝突事件に端を発した反日デモでは、日の丸を燃やし氣勢を上げる中国の若者たちに混じって取材した。

今回の訪中では、中国外務省幹部や識者が口々に日中友好を訴えるなど、取材団への厚遇ぶりに驚いた。国交正常化以降「最悪」ともいわれた日中関係が、改善傾向にあることを実感した旅だった。

共同通信外信部 花田 仁美

●本音を引き出すには…

今回の訪中では、どうしたら人々



第39中学校近くの前門(フートン)で。幼稚園のお迎え時間と重なり身動きがとれず

の「本音」に迫れるのか、考えさせられることが多かった。四川大地震の被災地を訪れた時、地元政府の担当者から震源地近くで飲食店を営む男性に取材するよう薦められた。大切な家族を失いながら、「政府のおかげで良い暮らしができています」と話した彼が、沈黙し、表情を曇らせる瞬間があった。本当に言いたいことは別にあつたのでは、と感じた。言葉の裏にある本心を聞きたかった。

読売新聞国際部 吉永亜希子

●中国の「お国柄」に触れて

自分の主張をハッキリと言い、簡単には謝らない。識者や外交部との懇談会で感じたのは、そんな中国の「お国柄」だ。それはウインカーを出さずに車線変更して前に行こうとする車や、狭い道でも一歩も譲らない自転車に通じるものがあると感じた。中国を読み解く1つの視点に触れることができた。「お国柄」をにじませる映像を撮れば、より中国へ理解が深まるのではと感じた。

九州朝日放送報道部 諫山建太郎

●「中国に原因なし」に募る不安

急速な経済成長を遂げたアジアの先進者として、日本のメディアが中国の人々に伝えるべきことがある。初めて訪れた中国で、その思いを強

くした。印象に残ったのは、中国政府関係者や有識者との意見交換。参加者は日本が戦後、解決できなかった問題として公害と少子高齢化を挙げた。水俣病問題を担当した記者としても、うなずける指摘だ。

これらは、中国もいずれ直面する問題だと思う。日本の失敗に学び、同じ轍を踏まないだろうか。九州のPM2.5問題で「中国が原因という科学的根拠はない」との意見を聞く、不安を覚えた。

熊本日日新聞東京支社編集部

●新聞が買えない? ネット重視に

朝、新聞を買おうと北京でホテル周辺を歩いた。街から新聞スタンドが姿を消し即売部数は減少、各社は宅配部数増に尽力していると聞いていたが、探せば簡単に買えると考えていた。しかし、売っている店は少なく、ホテルでは「ネットで見られる」と助言された。

座談会に出席した環球網の編集幹部も、オリジナルコンテンツに力を入れアクセス数を増やしていると話す。予想以上にネット環境が充実し、

新聞社はネットでの発信に注力していた。実際のメディア環境に触れ、大変勉強になった。

日本新聞協会協会報記者 鈴木 愛

戦後70年

奥野 誠亮 元法相

自主憲法へ 102歳の執念

11・19(木)シリーズ企画「戦後70年 語る・問う」③／司会：島田敏男委員／出席：56人／動画



これまでのクラブゲストの最
高齢は俳人の金子兜太さん
(96)が90歳の時だったそうだ
が、奥野誠亮さんは大正2年生
まれの102歳である。会見で
は旧内務省時代に灘尾弘吉次官の下で戦争終結処
理方針を策定したことから靖国神社問題、選挙制
度に至るまで懐旧談も含め広範な問題を語った
が、主眼は憲法問題だった。

「年賀状には『今年こそ本当の憲法を作ろう』と
書く。このままではいつまでもたっても戦後は終わ
らない。改憲ではなく自前の憲法を作るのが現下
の最大の政治課題だろう」と語った。

歴代首相で一番記憶に残る首相として高知県警
察部長時代に接点があった吉田茂を挙げて、1枚
の色紙を披露した。ダルマの墨絵に「新憲法 柵
のたるまも 赤面し」(素直)と添え書きしたもの
で「ここから吉田さんの心境が読み取れる」と。

さすがに固有名詞が出てこないこともあった
が、年月と事実関係の記憶力は常人の及ぶところ
ではない。普段は月曜から金曜まで文相時代から
手掛けるアジア福祉教育財団の名譽会長室に日勤
し、40年近く前に始めた旧内務・自治省出身議員
とマスコミ関係者との月例の勉強会も欠かさな
い。月1〜2回の麻雀というのも驚きだ。

会報委員 毎日新聞出身 長崎 和夫

不破 哲三 前日本共産党委員長

安倍政権の危険性を鋭く指摘

11・24(火)同シリーズ企画⑦／司会：倉重篤郎委員／出席：86人／動画



クラブ会見への登板は13回目、10年ぶりという
不破哲三氏は、85歳の高齢にもかかわらず、記憶
力抜群で、委員長当時の理路整然とした穏やかな
話しぶりも変わっていないかった。

政権が保守色を強めた時に共
産党は伸びるといわれてきた。
1971年の統一地方選で佐藤
榮作首相が「赤旗で都庁が包囲
されているのか」と都庁赤旗論
を叫ぶ中、社会党との共闘で美濃部知事の再選や
大阪での黒田革新府政を実現した。地方から中央
政府を包囲する「毛沢東」戦略を彷彿させた。ま
た72年末の衆院選では日中国交回復の余勢で圧勝
を狙った田中角栄政権に対して38議席と躍進し、
独走にストップをかけた。

「強い指導者には強い野党を」という有権者の
バランス感覚であろう。今また安倍晋三政権の新
安保法制などに、昨年の衆院選で躍進した共産党
が「国民連合政府」構想で対抗している。

「結党60年の自民党は今、安倍氏の下で最も危
険な状況にある」これほどモノカラーの強権・独
裁は初めて「国民は主権者の自覚を持って行動し
ている」。不破氏の声は穏やかだが、舌鋒は鋭い。
課題は共産党アレルギーの解消であろう。

中日新聞相談役 宇治 敏彦

市川 雄一 公明党特別顧問

時代に向き合う中道政の苦悩

11・27(金)同シリーズ企画⑧／司会：島田敏男委員／出席：80人／動画



冷戦終結直後、永田町で最も悩んだ人だったの
ではないか。「55年体制の下で模索した社公民路
線で、果たして時代の要請に応えることができる
のだろうか?」これが当時の市川書記長の胸の内
だったことが言葉の端々からにじみ出ていた。

1990年の湾岸危機から92年のPKO協立法
成立にかけて、公明党が社公民から自公民へと大
きく路線のかじを切ることで日本の政策決定が何
とか進むという状況だった。

89年の参議院選挙で自民党が
リクルート事件や消費税導入の
影響で大敗して衆参ねじれ状態
が生じ、期せずして公明党が参
議院でキャスティングボートを握
ることになった。中道を掲げる公明党にとって、
批判があっても、どう振る舞えば時代の要請に沿
うかが問われる局面だった。市川氏は「足して2
で割るのが中道ではない」と指摘しつつ、当時の
社会党が「一國平和主義」にしがみついていたこ
とが自公民へと向かわせたと振り返った。そして、
それがその後の政界再編の引き金にもなった。

会見で市川氏は、今の公明党に言及するのを慎
重に避けていた。しかし私には「常に中道とは何
かを考え悩む緊張感」を後輩たちに求めているよ
うに感じられた。

企画委員 NHK解説副委員長 島田 敏男



リオネル・ザンスー ベナン首相

日本のノウハウ 西アフリカで生かして

10・28(水)記者会見/司会:土生修一事務局長/通訳:池田薫/出席:20人/動画



西アフリカ15カ国で構成する E C O W A S (西アフリカ諸国経済共同体)代表団の一員として投資促進をめざして来日した。

ベナン人を父に、フランス人を母に持ち、フランスのエリート養成機関の高等師範学校を卒業して、エリートビジネスマンの道を歩んできた。ビジネスの腕を買われ、今年6月に首相に就任した。「E C O W A S 全体は過去20年間5%の経済成長を続けている。総人口の3億2000万人も25年間で倍増する。今後、急増する中産階級が消費財の巨大な需要を生み、海外投資にとって大きな魅力を持っている」と力説した。

仕事で日本との縁も深く、今回の訪日が55回目になるという。「アフリカでのアジアからの投資は中国ばかりが目立つ。日本は、保険から再生エネルギーまでアフリカが必要とするノウハウをたくさん持っているのに動きが鈍い。過去のアフリカのイメージにとらわれすぎでは」と、知日派として残念がった。

ベナンの駐日大使は、タレントでもあるゾマホン大使。会見出席者一人一人に挨拶して名刺を配り、この日はPR役に徹していた。

日本記者クラブ事務局長 土生 修一

ハンス・ヨゼフ・フェル 独エナジー・ウオッチグループ代表

日本でも「緑の党」生まれるか

11・4(水)記者会見/司会:石川洋日本記者クラブ企画担当部長/通訳:近藤あずさ/出席:40人/動画

国連気候変動枠組み条約第21回締約国会議(C O P 21)に向け、地球温暖化対策の在り方が問われている。ドイツ・緑の党の連邦議員を務め、今はシンクタンク「エナジー・ウオッチ・グループ」代表を務めるハンス・ヨゼフ・フェル氏は「地球を冷やすことは可能だ」と指摘した。

「まず、二酸化炭素の排出量を減らすこと」と言う同氏が強調するのは再生可能エネルギーの拡大だ。ドイツでその原動力になった2000年の「再生可能エネルギー法案」の起草者の1人でもある氏は「的確な政策があれば再生エネは迅速な成長が可能だ」とデータを示しながら強調した。



さらにバイオマスエネルギーやバイオ炭の利用で「大気中の炭素を取り出す」ことも可能になってきたと最新の取り組みを紹介してくれた。ドイツの脱原発政策に大きな影響を与えた緑の党は「多くの意識の高い市民や非政府組織(N G O)、再生エネルギー関係の団体など多くの力が結集された結果生まれた」と言う。

「原発や温暖化問題に取り組む市民運動など、さまざまな取り組みが日本でも増え、今後の進展が期待できる。影響力のある緑の党が日本でも生まれる機運は高まっていると思う」と分析してくれた。

共同通信編集委員 井田 徹治

河野の 太郎 国家公安・行革・防災担当相

発信力は健在 これから問われるのは実現させる力

11・5(木)記者会見/司会:川戸恵子委員/出席:71人/動画



原発再稼働への批判等を書いていたブログを閣僚就任直後に閉鎖したことから、その姿勢を問われた河野太郎国務大臣、答えは「これまで批判してきたことを中(＝閣内)でやれることはありがたいし、議院内閣制ですから、外に向かつては政府の政策を言わなくてはならないのは当たり前です」。

今回の会見は、間もなく始める行政レビューの説明が大半だったが、10年近く前に河野氏ら自民党若手が始めたことだけに説明も滑らか。「全部、原発予算に絞ろうかとも思いましたが、これまで批判してきた五輪関係予算についても、しっかりとレビューしていきます。それも大々的に、オープンに」と閣内に入っても河野流。「政策検証評価」と「重複の排除」を国民に見てもらおうことで無駄の撲滅につなげたいとのこと。

現内閣で一番多くの分野を担当、霞が関を飛び回る毎日だが、安倍首相に「改革断行の元締め」と言われたように、本命は行革。「橋本内閣の向こうを張って、例えば厚労省を3分割するとか、できたらそこまでやってみたいですね」。相変わらず抜群の発信力だが、これからは言葉どおりにそれらを実現させることができるのかが問われることになる。

企画委員 TBSテレビシニアコメンテーター 川戸 恵子

沖縄から考える

マイク・モチヅキ 米ジョージタウン大学教授
 橋本 晃和 桜美林大学大学院特任教授

11・18(水)研究会「沖縄から考える」⑦/司会：杉田弘毅
 委員/通訳：池田薫/出席：76人/動画



現実味はあるのか。政権が「唯一の解決策」と微動だにしない普天間基地の辺野古移設について、日米の2人の政治学者が「代替案は可能」と力説した。モチヅキ教授(右)と橋本教授は、返還交渉の端緒から関わって20年の専門家だが、異端扱いを承知の覚悟がにじむ。折しも会見前日、政府と沖縄の対立はついに法廷闘争に発展した。関係がこじれきった今、もう1つの道「沖縄ソリューション」を説く。

主張の核心は、安倍首相が進める日米同盟強化、安保大転換の動きを、沖縄問題の打破につなげる発想だ。「オスプレイ使用で可能性が開けた」と語るモチヅキ氏。新型輸送機を速く生かせれば配備先は県外も可と説き「より良い集積地は本土にある」と九州を挙げた。振り出しに戻す発言だが、予想を超えた県民の反発で問題が長期化する恐れを指摘する。「アメリカ側から懸念は言わない。ただ重要なのは元米政府高官が最近、柔軟になった方が良くと公言していることだ」。モチヅキ氏が語るアメリカの本音は気になる。最後は抑止力の維持が鍵となる。

日本テレビ報道局政治部長 伊佐治 健

松元 剛 琉球新報編集局次長

11・20(金)同シリーズ企画⑧/司会：軽部謙介委員/出席：60人/動画



「基地問題を語る上で、差別という言葉を使わざるを得ない」。冒頭、琉球新報編集局次長・松元剛氏は口にした。

辺野古新基地建設をめぐる、国が沖縄県を提訴したのは11月17日。『銃剣で接収 想起』知事、『沖縄差別』と批判。翌日の琉球新報の1面。見出しには「差別」という文字が並んでいた。

「差別という言葉を使うことに、かつて私たち現場の記者はためらいがあった。だがもはや、厳しい言葉を使って本土に、政権に、問い掛けざるを得ない」。基地問題の取材を続け、4半世紀。その視線は政権だけではなく、本土へと向けられる。「沖縄県民の命の重さは、本土と同じ重さで扱われているのだろうか」

琉球新報が行った世論調査では、県民の83%が県内移設に反対している。訴訟提起を伝えた紙面には、米軍キャンプ・シュワブゲート前で抗議行動を続ける地元市民らの姿があった。「日本の民主主義はまだ生きていて、ことを沖縄から示す。それを日本全体で共有できたとき、望ましい姿が見えてくる」

松元氏はゲストブックに記した。「沖縄は屈しない、民主主義を信じて」

神奈川新聞編集局デジタル編集部 松島 佳子

ブルース・ストークス ビュー・リサーチセンター国際経済世論調査部ディレクター

11・17(火)記者会見/司会：杉田弘毅委員/通訳：秋山賛/出席：29人/動画

世界の人々は何を恐れ、望んでいるのか。11月30日からフランス・パリで国連気候変動枠組み条約第21回締約国会議(COP21)が開催される。その開催前に気候変動に関する意識調査結果を発表した。対象は世界40カ国の約4万5000人で、同分野での大規模な調査は例がないという。



会見では世界的な危機意識の高さを強調した。気候変動を「非常に深刻な問題」と捉える人は54%に上り、78%が「自国が温室効果ガス排出を削減することには賛成」と回答している。「世界の人々はCOP21での合意を望んでいる」と調査結果を総括した。

一方で、合意の難しさも浮き彫りにした。温室効果ガスの排出量が多い米国と日本、中国で「非常に深刻な問題」と答える人の割合は、全体より低い。また米国では支持政党によって意見が大きく分かれることも明らかになった。

「かつてインド政府担当者からインド人は気候変動を心配していないと直接言われたことがあるが、この調査では逆の結果だった」とも強調した。国益が複雑に絡み合う国際交渉の場に、国民の声は届きにくい。こうした調査で世論を明らかにしていく意義は大きいと感じた。

日経BP社日経エコロジー編集部 大西 孝弘

カート・トン 米首席国務次官補代理

11・19(木)記者会見/司会：杉田弘毅委員/通訳：池田薫、秋山賛/出席：55人/動画



「きょうは羽田空港に焦点をあてたい」
そう切り出して会見を始めた米国のカート・トン首席国務次官補代理(経済担当)。去年まで在日米国大使館の首席公使を務めた日本通だ。

トン氏は、東京の空港(羽田+成田)が、シンガポールやソウルなど他のアジアの空港に比べて路線や便数が少なく存在感が低いと指摘。米国とアジア各都市との便は急増する一方、日米間は航空利用客が減少し経済関係の上でも問題だと警告した。そして「日本の友人からの忠告」として羽田空港のさらなる国際化を訴えたのだ。

日本政府も羽田空港の国際化を推進。2020年の東京オリンピックに向けて国際便を一段と増やす方針だ。しかし、どう増やすかで日米の立場が異なる。

トン氏は羽田空港の運用の効率性を上げるべきと主張した。氏によれば、羽田空港は安全性に関する規制が厳しいため、他の都市の同規模の空港に比べて、便数が少ないという。一方、日本側は米軍の横田基地が管理する空域を問題視している。横田基地の空域を民間機が通過できれば羽田空港の便数が増えると提案している。羽田空港の国際化をどう進めるか、日米の交渉に注目したい。

NHK国際部 油井 秀樹

アントニオ・グテレス 国連難民高等弁務官

11・26(木)記者会見/司会：杉田弘毅委員/通訳：藤岡美恵子/出席：45人/動画



沈痛な記者会見だった。12月末に10年の任期を終え退任するグテレス国連難民高等弁務官は、「10年前に比べて世界は明らかに悪くなり、難民の状況もはるかに厳しくなった」と肩を落とした。

この10年間ベストを尽くしたつもりだが、「誇れる遺産など何も思いつかない」と言う。その思いは数字が裏付ける。

10年前、国外に出た難民と国内に残りながらも居住地を出た国内避難民は合わせて3800万人。だが、今は6000万人に膨れ上がった。紛争終結を受け故郷に戻る人も10年前は1年間で100万人いたが、今は12万4千人しかない。それもこれもシリアをはじめ中東・北アフリカの紛争が大きく影響している。今年だけで中東から欧州に80万人が向かった。UNHCRも欧州諸国に組織的な受け入れを要請してきた。

しかし、パリで起きた同時多発テロでハンガリーなど一部の国々がイスラム教徒の入国を拒否する事態に失望は大きい。「テロリストは欧州育ち。難民に罪を負わせないで」と訴えた。

それにしても、経済は発展し技術は向上している。貧困も減った。だが、紛争は増え難民は増えている。それはなぜか。突きつける問いが残った。

企画委員 共同通信論説委員室長 杉田 弘毅

鈴木 大地 スポーツ庁長官

11・26(木)記者会見/司会：倉重篤郎委員/出席：55人/動画

就任から約2カ月。48歳の若き初代長官は、少しずつ独自色を出そうと腐心している。現役時代同様の軽快なフットワークで、週末も含め精力的に現場視察を行う。自ら発信する機会を持ちたいと、11月からは庁内で定例の記者会見も始めた。



金メダリストであり、日本水泳連盟会長としても短期間で収支を改善させるなど、常に結果を出してきた長官には「お役所の人の苦手な分野」も見えてきたようだ。例えば毎年さまざまな調査を行い、データが蓄積されているにもかかわらず、それが生かされてない点だ。国は定期的に成人のスポーツ実施率を調べているが、今年度は減少に転じた。2020年東京五輪・パラリンピックを前にした危機的な状況に、「調査するだけでは駄目。その理由を探らない」と早急に分析を指示したという。

ほかにも、団体・個人種目別のメダル獲得ランキングを明確にすることや、スポーツに関する都道府県別の指標作成などのアイデアも示した。

民間出身の長官に求められるのは、これまでの慣例を打ち破ることだ。就任時、政府関係者は「スポーツ界のシンボルにふさわしい」と話したが、象徴にはとどまらないかじ取りを期待したい。

読売新聞運動部 勝俣 智子

ティエリー・ダナ 駐日フランス大使

テロ後もフランス人の生き方は変わらない

11・18(水)記者会見/司会: 服部尚委員/通訳: 三宅薫子/出席: 92人/動画



パリ同時多発テロ(日本時間11月14日早朝発)から4日目の18日午後、ダナ駐日仏大使が会見した。同じ頃、パリ近郊サンドニでは、容疑者グループと仏警官隊の銃撃戦が繰り広げられた。まさにオランダ大統領が非常事態を宣言し、「フランスは戦争をしている」とした状況の真っただ中での会見となった。大使は憔悴した様子だったが、11月末からパリ郊外で始まるCOP21(国連気候変動枠組条約第21回締約国会議)について淡々と説明した。

まず予定どおり開催すると強調。予備会議では先進国と途上国との対立が鮮明になっているが、COP21は「終着点ではなく、むしろ始まりだ。今後の方向付けになる会議」と位置付け、議長国として妥協点を粘り強く探る考えを示した。

「世界中に暴力や狂信が横行する中、1つの目標をもって共に協力し合えるものがあるとするれば、それは環境問題だ」と述べ、各国がさまざまな違いを乗り越えるべきだと主張した。

質疑応答ではテロに質問が集中。観光への打撃は「一時的なものになることを望む」とし、「日本

の皆さんが愛するフランスは、ずっとそのままだ。文化や、生活を楽しむというフランス人の生き方は変わらない」と言い切った。その一例として、飲食店のテラス席にいた人もテロの犠牲になったが、テロ後にも皆が好むテラスでの食事を敢行して「自分たちの生き方は変えないことを示した」と人々の行動を紹介した。

フランスでは11月18日、オランダ大統領がシリアからの難民3万人を受け入れると表明。「フランスの人道主義の責務だ」と述べた。テロ容疑者にギリシャ経由で難民入国したと疑われる者がない、だ。フランスの人々の冷静で毅然とした対応こそが、テロの元になる「憎しみの連鎖」を、時間はかかるが確実に断ち切っていくのだと思う。

朝日新聞フォーラム事務局 丹内 敦子



パリ同時多発テロの犠牲者に哀悼の意を示し、会見に先立って、ダナ大使(右端)をはじめ出席者全員による黙祷が行われた。(栗田格会員撮影)

ダナ大使は今回が当クラブの会見デビューだが、17年前に当クラブで会見したシラク仏大統領(当時の写真がクラブの壁に掛けられているのを見て、微笑した。「この時、私は大統領府官房スタッフの1人として大統領に同行、大統領と一緒にこのクラブに来たんですよ。懐かしいですね。」「3度目」も期待したい。(土生修一)

加藤 勝信 1億総活躍・拉致問題相

緊急項目は補正で措置

11・27(金)記者会見/司会: 倉重篤郎委員/出席: 85人/動画



安倍晋三首相から「1億総活躍特命相」の指名を受けた時は「エッ?と思った」(周辺)とされる加藤氏だが、さすがに財務官僚。順応は早い。就任して1カ月半で、68項目の緊急対策をまとめ、この日の会見で発表した。

総じて網羅的、総花的な対策の中で、加藤氏は首相からは「希望出生率1.8」と「介護離職ゼロ」の2つを重視するよう指示があったことを明らかにし、出生率アップ対策として①不妊治療への助成の拡大、特に男性側への支援の充実②子育てを支え合える3世代同居・近居しやすい環境づくり③子育てが困難な状況にある家族・子どもへの配慮・対策の強化などを強調した。

また、消費喚起策として、最低賃金を年率3%ずつ上げ2020年には10000円にすることをめざすと表明、アベノミクスの恩恵の及ぶにくい低年金受給者には緊急支援を行う方針を示した。

会場からは、「旧アベノミクスの総括はどうなったのか」「どうやって財源を用意するのか」といった、実現を疑問視する質問が多かったが、加藤氏はこれら政策項目のうち「緊急対応」とされている12項目については年明けにも提出する補正予算で措置する、と対策実現に自信を見せた。

企画委員 毎日新聞専門編集委員 倉重 篤郎

植民地を考えてこなかった ポツダム体制を生き延びている 政府が派遣して死んだ責任

《戦後70年》
この6本

題点は賠償の先送り。爆弾を抱えている。ギリシヤの賠償請求はすごい金額です。

今年も会員の皆さんが内幸町発の記事や番組をたくさん報じてくれた。日本記者クラブの会見からそれぞれ戦後70年を切り取ったことばを残しておきたい。



① 朴裕河さん（2月23日、韓国・世宗大教授）慰安婦問題を植民地支配の視点で語り直す。「韓国は戦争犯罪として被害者になったわけではない。植民地となった結果の動員だった。領土拡張の欲望、支配、帝国について日本は国民レベルで考えてこなかった」。パ
ラダイムシフトを
促す著書『帝国の
慰安婦』の波及力
は大きい。韓国で
起訴されるとは。

② 佐藤健生さん（5月13日、拓殖大教授）ドイツ現代史家の日独戦後比較論。「現在の国家は戦前とは異なる。その証しをドイツは立て続けている。ナチスとは違うのだ、とこ
とばだけでなく行動で示す」。全て
解決済みとはいかない。「最大の問

す」。戦後は、ここでも終わらない。
③ 柳田邦男さん（5月27日、ノンフィクション作家）「被害者の精神史」の取材テーマと79歳の個人史を重ね合わせた。原点の1つは原爆。知ったのは高校1年、1952年だった。独立で検閲がなくなり「アサヒグラフ」が初めて原爆を特集した。「非常にショックを受けた。それまでまったく知らなかった原爆被害のすごさ、後遺症の大変さ、戦後7年たつてなおこうなのか。私の一生で大きな意味を持った。今の福島原発事故につながるのです」

④ 篠田正浩さん（6月1日、映画監督）最後の作品「スパイ・ゾルゲ」（2003年）を中心に戦後を語った。「憲法9条は、アメリカが天皇を象徴とする代わりに戦争させない日本を確定した。これはポツダム宣言の実現です。われわれはポツダム体制の中に戦後も生きています」

⑤ 河野洋平さん（6月9日、元官房長官）「葬儀の席で小さな子どもが駆け回っている。それを見て、政府

の指示で外国に派遣した人間が死んだ、われわれの責任はどれぐらい重いのか、つくづく思った。今でも胸が詰まる」。1993年、カンボジアPKOの高田晴行警視が武装集団に撃たれ死亡した事件を振り返った。国会の安保法案審議で自衛隊のリスクが「増える」「増えない」論争を聞いて「信じられない議論だ」。

⑥ セルダハイ・イシュトバーンさん（10月21日、駐日ハンガリー大使）難民を拒むと批判されたハンガリー。「メーンポイント」はシエンゲン圏の存在だ。ハンガリーはシエンゲンに入り、やっとな
ヨーロッパの一員
になった。シエン
ゲンの境界を守れ
ないと、（隣国）オ
ーストリアとの間
に国境ができてしま
う」。不戦と寛容
を掲げて戦後、築
いた統合欧州。シ
エンゲン圏の最前
線に位置するがゆ
えに、難民管理が
できないと、欧州
から排除されると
恐れるのか。あの
フェンスには国の
成り立ちがかか
っていた。そのフェ
ンスを越えても自
由を求めると人々
が押し寄せる。流
血と混乱の世界は
戦後71年へ。



（いずれも動画があります）
（中井良則）

■ 会議報告

● 第457回企画委員会

（11・6 大会議室）

独ニユース週刊誌シュピーゲルの東京支局長、ヴィーラント・ワググナー氏を新委員に委嘱することを決めたほか、今後のゲスト候補や研究会テーマについて協議した。

出席 西村委員長、倉重、福本、橋本、実、水野、宮田、榊原、川上、軽部、山本、瀬口、原田、宇留間、島田、竹田、山崎、川戸、川村、和田、堀、梶本、橋場の各委員。

● 第368回会報委員会

（11・10 大会議室）

11月号について意見交換した後、12月号、1月号の編集について協議した。月1回発行の会報「クラブゲスト」欄と、日々更新するウェブサイト「会見リポート」の連携について引き続き検討し、両媒体の特性を生かした発信に切り替えることを決定。1月号から紙面をリニューアルすることにした。

出席 飯塚委員長、稲沢、高橋、渡辺、向山、佐塚、長崎の各委員。

● 第459回会員資格委員会

（11・19 小会議室）

12月1日付入会を審議し、理事会に答申した。

出席 小田委員長、菊池、畑山、山本、國府の各委員。



「見出しだけでも…」
若者にニュースを
届ける難しさ

もらいたい。それだけでも、効果はあるはずだから」と。
能動的にニュースを見
ていかない若者たちへの
リーチに効果的なのはプ
ッシュ通知によるニュース速報だ。

最近の学生の例に漏れ
ず、ほとんど新聞を読まな
いわが娘。それでもたまに
はニュースの話題を持ち出
すことがある。そんな時、
決まって彼女は言う。「ヤ
フトップで見た」

その「ヤフトップ」。
8ジャンルのニュースの各
トップ8本、計64本のニュースから、
記者の手によって選ばれた、まさに
「トップニュース」なのだ。ア
クセスが多いのは圧倒的にスポーツ
とエンタメ。スマホからのアクセス
では、その傾向はさらに強いです」と
伊藤氏は言う。

自分との接点が多くないニュース
に対する若者の関心の低さは常々語
られているところ。もともと大学時
代に「9・11」の報道に接して「ネッ
トでのニュース報道」を志した伊藤
氏としては複雑な思いがあるだろう
が、それでも「アクセスが伸びなく
ても、大事なニュースは取り上げる」
と言い切る。「見出しだけでも見て

田上 敦士
11・9(月)「ミレニアル世代と向き合う
プラットフォームの視点」/司会・橋
場義之特別企画委員/出席・参加23人+
ネット視聴12人



権力監視の調査報道は
日常取材の延長線上

開されている資料を丹
念に読み込む——。
何度も繰り返し返したの
は、権力監視報道は
「日常の取材の延長線
上」ということだ。「権

ぐいぐい引き込まれる濃
密な2時間だった。日本の
調査報道の第一人者として
知られる高田さんは、自ら
手掛けたいくつもの特報記
事を材料に、情報源との駆
け引きや端緒の取り方を
生々しく、かつ惜しみなく
語った。言葉の端々から感

じられる鋭い問題意識は、豊富な知
識を常にアップデートすることによ
って培われているようだった。
権力監視の報道とは「評論ではな
く事実の積み重ね」であり、「端緒
が全て」だ、と高田さんは言う。そ
のために主に5つの点に留意してき
た、という。①日常の取材相手に「内
部告発先」として信頼してもらおう②
アングラ情報屋など「クリーン」でな
い相手、元政治家や元会社役員な
ど「元職」と意識して付き合う③証
言だけでなく証拠を入手する。証言
は必ず録音する④記者会見では相手
に「反問」「疑問」をぶつける⑤政治
資金収支報告書や決算書類など、公

日下部 聡
11・27(金)「権力監視の条件と環境」/司
会・橋場義之特別企画委員/出席・13人

パリ同時多発テロ 現場を歩く 国末 憲人(朝日新聞論説委員)

どこか似ている「被害」と「加害」 分岐点にあったものは

偶然も、2度重なるると必然かもしれない。1月に起きた風刺週刊紙『シャルリ・エブド』襲撃事件の際は、以前から予定があった出張で4日後にパリに降り立った。今回もやはり出張で、同時多発テロ翌日にパリの地を踏む機会を得た。

次の朝、現場を1カ所ずつ見て回った。襲撃されたカフェやレストランの弾痕が生々しい。破損した戸口、飛び散ったガラス。絶え間なく市民が訪れ、花束やろうそくを置いていく。テロリストが死亡しただけで市民に犠牲の出なかった現場にも、やはり花束がある。

テロに倒れた人々が最後に見た風景を脳裏に刻む。彼らの多くは、私の人生の半分程度しか生きていない。本人の無念、残された人々の苦悩に思いをはせる。

一方で、加害者たるテロリストたちが生まれ育った風景も目にしなくては、防止策が見えてこないだろう。これも偶然、その3日後にブリュッ

セルで取材があったので、郊外の過激派の拠点モレンベークに足を延ばした。自爆した容疑者らが経営していたカフェ、パリ郊外の銃撃戦で死亡したテロ首謀者の自宅などを回り、街角で市民の話聞いた。

欧州の多様性の中で育った 同世代の若者たち

被害と加害と、双方の現場を歩いた印象は、「何だか似ているな」だった。

テロ現場のパリ東部10区と11区は、移民の多い下町であると同時に、左派支持の知識層に近年人気が出ている地域である。モレンベークも、イスラム教徒は確かに多いものの、基本的に世俗文化が定着した街だ。多様性の雰囲気は生まれ、地元の人々が住むという。

犠牲となったパリの市民と、テロを実行したイスラム過激派との間には、何の接点もないように思っていた。しかし、両者は実は、共通点の

多い空間に暮らし、似通った風景を見て育ったのではないか。世代もほとんど同じ30歳前後だ。

テロリストたちは、砂漠の匂いと、古風で信心深そうな雰囲気身にまとう。その主張には、「聖戦」「殉教」「イスラム社会が受けた屈辱」といった言葉の装飾がちりばめられる。

しかし、それは「イスラム国」やアルカイダから借りてきた衣に過ぎない。一皮めくると、欧州社会の若者たちだ。彼らの故郷を見て、そう実感した。

加害者らは、途中まで被害者たちと同じようなところにいたのである。どこかで道を踏み外し、誤った方角に向かった。分岐点に何があったのか。彼らが過激派への

一歩を踏み出した原因と過程の解明こそ、テロをなくす上で取り組むべき課題ではないか。

テロリストそれぞれの軌跡を追うことから

テロリストを生む理由として、貧困やイスラム教徒への差別、フランスの政教分離の方針などが、しばしば指摘される。しかし、例えば貧困がなくならないとテロもなくならないかという点、そんなことはない。たとえ貧乏であれ、大部分の人はテロなど起こさない。出来事と一般的な状況とを安易に結びつける説明は、往々にしてテロリスト側が振りまく口実だ。

そのような言説に惑わされることなく、具体例をしつかり見据えたい。それが、私たちジャーナリストにできることでもある。

テロリストそれぞれの軌跡を追う作業に、自分なりに取り組みたいと思う。社会学や心理学の専門家、カルト対策に携わる人々との協力も必要になるだろう。その営みの向こうに、テロを防ぐ糸口が見えてくるに違いない。



襲撃を受けたパリのバー「カリオン」の窓ガラスには弾痕とメッセージが(11.24/筆者撮影)

くすえ・のりと▼1987年入社
001〜04年パリ支局長 07〜10年同支
局長 14年から論説委員



66年ぶりの握手 習近平・中国国家主席(右)と馬英九・台湾総統(11月7日/共同通信社提供)

中台首脳会談 台北支局

鈴木 雄士(共同通信社)

華やかさの裏にあるものは 詰め掛けた記者千人、前日から行列

切れ目ないカメラのフラッシュを浴びながら、長い握手で「歴史的」成果を存分に誇った中国の習近平国家主席と台湾の馬英九総統。1949年の中台分断後初の首脳会談が11月7日にシンガポールで開かれたが、表面的な華やかさとは対照的に、会談の背景や双方の思惑は必ずしも明瞭でなかった。

会談では、中台は不可分の領土だ

とする「1つの中国」の原則を再確認。台湾独立志向の野党、民主進歩党(民進党)がリードする来年1月の総統選を前に、同原則を認めない民進党をけん制したが、会談後も民進党の優勢は変わらない。中台統一に向けた協定締結などには至らなかったため、台湾住民は会談を比較的に冷静に受け止めたようだ。ただ、首脳会談自体には賛成世論が多く、民進党も政権奪還後の実現に意欲を示している。会談の影響や意味がより明確になるのはこれからだ。

当局混乱、記者証差し替えも

当日は、現地シンガポールと北京からも記者やカメラマンの支援を得たが、数日前に会談実施を急ぎよ発表した当局の対応は混乱し、振り回された。台湾側は会談スケジュールなどを前日6日夕にようやく説明。会談当日も、記者会見場所の変更や、台湾当局による記者証差し替えといったハプニングが相次いだ。

記者証は、申請者に中台それぞれが発行。台湾は当初、中華民国成立の1912年を元年とする紀年法で「民国104年」と記して発行したが、会談直前に急ぎよ回収、中国と同じ「2015年」と記したものを配り直した。チェック体制の混乱を懸念したシンガポール政府の要請と説明するが、中華民国の存在を認めない中国の圧力との指摘もある。

中台が別々に実施した会談後の記者会見などの出席枠についても、台湾側は当初「1社4人まで」と説明したため人選に悩まされたが、実際は中国当局への申請者は別枠だった。

台湾側によると、7日の会談には計600人超が記者証を申請、未登録の記者らも合わせ、1000人近くが会場のシャングリラホテルに詰め掛けた。ホテルの1階ロビーに設置された金属探知機前には前日から行列ができ、筆者は当日の検査通過に3時間近くを要した。中国が絡む取材は規制が強まるのが常だが、今回は習氏出席などで警備が厳しさを増し、混乱に拍車をかけたようだ。

中国主導で想定外の実施

会談実施が明るみになったのは3日深夜。「民主国家の常軌に背いた」。

野党寄り台湾紙が、決定手続きが不透明だと批判を交えた「独自ダネ」をウェブサイトで報じ、台湾当局がほどなく確認した。馬氏は会談への意欲をこれまで何度も表明してきたが、総統選が近づき、馬氏の残り任期も約半年と迫ったこの時期の実施を、事前に予測できた人はほとんどいなかったとみられる。

翌日の台湾各紙は一面トップなどで大きく報じたが、記事の分量は限定的で、洪水のような紙面展開となつたのはさらに翌日だった。

首脳会談は、昨年の北京でのアジア太平洋経済協力会議(APEC)首脳会議の際に実施観測が一時強まったが「国際会議の場は望まない」とする中国側の反対で見送られ、実現は遠のいたとみられていた。今回の会談は中国側が持ちかけたことであるが、詳しい経緯は分かっていない。中国側には、南シナ海問題で台湾との連携の可能性をちらつかせることで米国をけん制する狙いもあるとの見方が出ているほか、馬総統の残り任期中2回目の会談の可能性もささやかれる。会談後の中台の動向をさらに注視したい。

すずき・ゆうじ ▼1993年入社 佐賀支局 外信部 香港支局などを経て 2013年から台北支局

大阪ダブル選 維新2勝

奥田 信幸(毎日放送)

橋下市長、類を見ない発信力 「改革の正体」を追う

11月22日午後8時、投票が締め切られると同時に、テレビ各社が「ダブル選維新2勝」の速報を流すという維新の強さばかりが目立つ選挙結果となった。しかし、その会見場に橋下徹大阪市長の姿はなかった。

5月の住民投票で大阪都構想が否決され政治家引退を表明するまで、ほぼ毎日登庁・退庁の2回、マスメディアの取材を受けてきた橋下市長。私はその囲み取材の中で、最も激しく議論を戦わせた記者の1人だ。

橋下市長の実行力、発信力は他の政治家に類を見ない。たとえ反対が強くとも一度やると決めたことは、時には強引ともいえる手法で実行し、議会との対立で否決されながらも、さまざまな「改革」を実行してきた。市長自身、普段から「何もやらずに批判されるくらいなら、改革をやって批判される方がいい」と述べている。

しかし、これまでの政治家が手を

つけないかった「改革」の多くはメリットもあればデメリットもあった。政治行政で頻繁に使われる「改革」という言葉、これはなかなかのくせ者で、簡単に評価するのは難しい。だからこそ、私はその「改革の正体」を伝えることこそが自分の役割だと考え報道してきた。

再度「都構想」掲げた覚悟と戦略

橋下市長の実行力の源は、表では



街頭演説に立つ橋下大阪市長(毎日放送提供)

「大阪を良くするための改革」であり、裏では「選挙での勝利」ではないかと思う。選挙で民意を得ているからこそ、強い反対があっても施策の正当性を主張することができたのだろう。

それだけに選挙に対するこだわりは尋常ではない。自分が立候補したもののだけでなく、維新の会が関わる多くの選挙で膨大な労力をはらってきた。

特に住民投票の前1年間は、毎週土日のたびに「タウンミーティング」と称して街頭演説を繰り返し、全国から国会議員、地方議員にかかわらず大阪に集結させ、支持を訴え続けてきた。

大阪市を廃止し5つの特別区とする大阪都構想にも当然、メリットとデメリットがある。私はメリットだけを訴え続ける橋下市長の姿に違和感を感じながらも、一方で橋下市長が住民投票にかける労力には感心させられた。

それでも「大阪市」をなくすことに対する住民の不安は根強く、住民投票で否決されることとなるが、橋下市長がかけてきた労力を考えると、引退を表明したのもうなずける気がした。それが一転して都構想を掲げてダブル選挙を戦うにあたって

は、さらに並々ならぬ覚悟と戦略をもっていたと考えられる。

選挙戦の勝因は「訴え」の定着

住民投票で「否決」の結果から一転、維新がダブル選に勝った理由はさまざま考えられる。この半年間、大阪の自民党が都構想に代わる「改革」を打ち出せなかったこと、住民投票と異なり自民、公明、民主、共産が一枚岩となれなかったことなど、いろいろあるが、最大の要因は「維新が訴え続けた「改革イメージ」の定着」ではないだろうか。

知事時代から8年間メディアで取り上げられてきた「改革」、そして選挙のたびに橋下市長が街頭で訴え続けた「改革」は、今や市民にかなり浸透している。しかし、その「改革イメージ」は勝手に定着したのではなく、橋下市長の類いまれな発信力と選挙にかける労力によって築き上げられたものだ。

振り返って、われわれメディアは果たして橋下市長に見合うだけの覚悟と労力をもって「改革の正体」を伝えることができたのだろうか。私は今も自問自答している。

おくだのぶゆき▼1990年入社
大阪府担当 報道局デスク 夕方ニュース編集長などを経て、2011年橋下大阪市長誕生とともに再び大阪市政担当

被災地通信④ 福島県浪江町

候補者、有権者に戸惑い 全町避難地域の選挙戦

伊東 一浩 (福島民報社)

東京電力福島第一原発事故により全町避難が続く福島県浪江町で11月15日、原発事故後初めて選挙戦となった町長選(2011年は無投票)が投票された。現職と2新人の3候補者のうち現職の馬場有氏(67)が有効投票数の7割近い得票数を集め、3選を果たした。これまで進められてきた町の復興施策が支持された形だが、町民が県内外で避難生活を送る中の前例のない選挙は候補者、有権者ともに戸惑いながらの戦いとなった。



避難先の仮設住宅で候補者の演説を聞く浪江町民 (2015年11月9日/福島県南相馬市/福島民報社提供)

有権者の所在つかめず 渋谷で街頭演説も

「こんなものが、公正な選挙と言えるのか」。ある陣営の関係者は、いら立ちを隠さずに言った。選挙事務所には、「宛先人不在」で戻ってきた選挙運動用はがきが山のように積まれている。選挙当時、避難生活は4年8カ月目を迎えていた。仮設住宅から災害公営住宅に移ったり、新居を構えるなど、住居を転々としている町民はまだまだ多い。候補者は、有権者の所在をつかむことすらままならなかった。電話がつかまっても、町長選の投票日を知らない有権者もいたという。

各候補者は県内の仮設住宅を中心

に遊説したが、直接、公約を聞いてもらえる人数は限られた。人通りがない浪江町の中心市街地で政策を訴えたり、東京・渋谷駅前街頭演説を繰り広げた候補者もいた。東京に赴いた候補者の選対幹部は「マスメディアや、フェイスペインクなどのソーシャルメディアに取り上げられれば、町民の目に触れると考えた」と苦肉の策を明かす。「全ての有権者に政策を伝えることが不可能な選挙だ」。候補者の1人はため息をついた。

不在者投票の手続きにも課題

異例づくめで行われた町長選の投票率は56・05% (男55・46%、女56・60%)で過去最低となった。原発事故前の07年の73・51%を17・46ポイント下回った。町選挙管理委員会は、投票率低下の要因の1つとして、不在者投票の手続きの煩わしさがあると分析している。投票するためには「不在者投票請求書」に必要事項を記入し、町選挙管理委員会へ郵送する必要がある。投票を受け付ける時間は、避難先の最寄り自治体の執務中に限られるため、おおむね平日の午前8時ごろから午後5時ごろに制限される。投票所に赴けばよい期日前投票に比べ、手続き上の不便さが際立つ。

事務局側にも改善の余地があった。今回、候補者の政策などが記された選挙公報が有権者に届くまで、告示後1週間以上かかった世帯があったという。選挙期間は通常の町長選の2倍に当たる10日間としたが、不在者投票の手続きに要する時間を考慮すると遅すぎたと言えるだろう。浪江町だけでなく、他の避難自治体の選挙でも今後の課題として捉えていく必要がある。

帰町を進めるため 一層の努力求められる

3選を果たした馬場氏にとつて、3期目は帰町を進める任期となる。帰町開始の目標は17年3月としているが、有権者による検討委員会や町民の意見などを聞いた上で、最終判断する。

町長選の投票率低下は、町への関心が薄れている町民が増えている表れでもある。年が明ければ原発事故から5年を迎える。時の経過に伴い、町民の生活環境、心境は大きく変わっている。復興を実現させるために、馬場氏にはこれまで以上の発信力と確固たる将来像の提示が求められる。

いとう・かずひろ ▼2000年入社 報道部 郡山本社 いわき支社などを経て 14年4月から南相馬支社兼浪江支局

私^が会^{った}
あ^の人

資本主義を考え抜いた経営者 クロネコヤマトの小倉昌男さん

永野 健二（日本経済新聞顧問）

私が初めて小倉昌男さんとお会いしたのは、1995年の初めのことだった。私が編集長をしていた雑誌「日経ビジネス」が、雑誌の配送を郵便局の配達から、宅急便に切り替えるという大胆な試みを実行することになった時に、ごあいさつする機会に恵まれた。

この試みは、その後、阪神大震災による交通網の混乱など、さまざまなアクシデントにも見舞われ頓挫するのだが、私にとっては、情報と流通と消費者へのサービスが一体となつて、場の流れを形成するメディア社会の変質を考える上で、大変勉強になった。

クロネコヤマトは、その後も、「個人のサービスに資することが公益ではないか」という揺るぎない哲学でサービスを広げ、人間と人間を、物とサービスを媒介としてつなぐ仕事を提供してきた。

私は、クロネコヤマトの業態と小倉昌男の哲学は、われわれマスメ

ディアと言われる仕事を超えて、新しい時代のメディアの機能そのものと強く感じたことを思い出す。

99年10月初版の『小倉昌男 経営学』のなかで、彼はこの本を「生涯に最初にして最後、一回限りの著作である」と宣言している。『経営学』の内容は、現在もまったく陳腐化していないし、小倉経営学の全てが詰まっている。

最大のポイントは、「個人顧客の集配効率は極めて悪い」という運送業の常識に反して、「全国規模の集配ネットワークを築けば、個人の集配サービスはビジネスになる」という小倉さんの仮説だった。

インターネット時代には、もはや



小倉昌男さんが構築した集配ネットワーク（時事通信社提供）

常識となつているP to Pのネットワークの合理性の世界を、それより20年以上前の70年代の前半に突き詰め、行動に移したのである。

そして、ネットワークの合理性を実現する上での最大の抵抗勢力は官僚と銀行だ、と喝破した。小倉さんの官僚、銀行嫌いは生涯変わらなかつた。

出版の関係者が驚いたのは、彼が『経営学』の一字一句、全て自分で書き、それがほとんど、デスクが筆を入れる必要がないほど完成度が高かつたことである。そして、経営書としては異例の大ベストセラーとなつたのである。本当に一流の経営者は、一流のライターでもあるんだなあ、というのが、当時の私たちの一致した意見だった。しかし、そんな人は小倉さん以外は見当たらないな、というのが結論だった。

小倉さんが晩年、身障者の福祉事業に熱意を示したことから、彼を反資本主義的な、あるいは資本主義とは異次元のリーダーと考えたがる向きもある。しかし、それは間違いである。小倉さんは最後まで資本主義を考え抜いた経営者だった。

「資本主義においては在庫がポイントだね」。晩年の小倉さんが、私たちに投げかけたテーマである。在

庫は企業にとって最大のリスクである。しかし、在庫が少なくなり過ぎることは社会にとって、あるいは消費者にとつて、もつと大きなリスクかもしれない。

ビル・ゲイツやインターネット主義者の一部が能天気理想化していた、インターネット社会が実現する、摩擦なき資本主義の矛盾に小倉さんは早くから気がついていた。

アマゾンやグーグルが拡大する、インターネット社会における独占の問題の先取りでもあった。

私財の大半を福祉事業に寄付しながら、私たちの支払う講演料は気持ちよく受け取った。「柳橋で遊ぶ資金は、自分で稼がなければね」。奥の深い交友関係を持った人だった。

小倉昌男が考え続けたのは、資本主義は公益に資することができるのかという問題だった。それは、アルフレッド・マーシャルが提起した、経済的騎士道はあり得るのかという、古くて新しいテーマでもある。2005年没。稀代の名経営者にして、本当に、形のよい人生を送った人であった。

（ながの・けんじ 前BSジャパン社長）

次は川本一之さん（元中国新聞社長）にバトンが渡ります。

男女雇用均等、共同参画

「女性」を書き続けた記者生活

鹿嶋 敬



かしま・たかし
 1969年日本経済新聞入社 編集局生活
 家庭部長 編集局次長兼文化部長 編
 集委員 論説委員などを経て 2005年3
 月退社 同年4月から15年3月まで実践
 女子大学人間社会学部教授
 現在 一般財団法人女性労働協会会長
 兼専務理事 男女共同参画会議議員
 内閣府計画策定専門調査会会長等を兼務
 著書に『男女共同参画の時代』(岩波新書)
 など

◆「雇用平等法を阻止しませんか」

「鹿嶋さん。雇用平等法(男女雇
 用機会均等法)以下、均等法と表記
 した)は日本を危うくする。成立を
 阻止しませんか。そういう趣旨の記
 事を書いていただけると、省内で
 の議論や新たな情報を逐一お知らせ
 します」

そう訴えかける目は真剣そのもの
 だった。1983年のある日、均等
 法が制定される2年前の話である。
 場所は東京駅八重洲口側の喫茶店。
 お相手は旧労働省のキャリア組Aさ
 ん(男性)。労働省は82年7月に、
 均等法の制定に向けて男女平等法制
 化準備室を設置する。実行部隊は各

局えりすぐりの優秀なスタッフで構
 成され、Aさんもその1人だった。
 均等法を作る準備室にAさんのよ
 うな人がいたのでは、その2カ月後、
 婦人少年局長に就任した赤松良子さ
 んもたまったものではあるまい。だ
 が、当時はそのような時代だった。

取材で会う企業の人事担当者や役
 員らは、均等法の制定は革命だと一
 様に不安を隠さなかった。「企業は
 女性が一定年齢で辞めることを前提
 に制度ができています。辞めなくな
 たら海外の企業との競争力を失いか
 ねない」と言う人までいた。

84年には総合誌に「男女雇用平等
 法は文化の生態系を破壊する」と題
 する識者の論文まで登場する始末で
 あった。女の主戦場は家庭だ、とす

る性役割の固定化が崩れることに、
 多数の企業関係者や識者の一部が危
 機感を抱いていたのである。

そんな時代状況の中では、Aさん
 のような官僚が出現しても不思議で
 はない。Aさんなりの憂国の情に燃
 えていたがゆえの申し出だったと思
 うが、私はきっぱりと断った。固定
 的に性役割を考えるのは限界にきて
 いること、近い将来(85年)批准す
 る女子差別撤廃条約は女性に対する
 差別を撤廃するため必要な措置を取
 るよう求めていることなどを挙げ、
 均等法の制定施行に向けて記事を書
 いていくと申し上げた。

が、Aさんとは名刺の交換はしてい
 ない。この問題の取材は女性記者が
 中心で私のように男性記者は珍しか
 ったが、男性記者の方が話しやすか
 ったなどの事情もあるのだろう。

◆脚光浴びた初の女性総合職

後日談になるが、85年に均等法が
 制定になると間もなく、Aさんは労
 働省を退職したという噂が伝わって
 きた。考え方が違うとはいえ、主義
 主張に殉じた昔気質の官僚魂に触れ
 た思いではあった。

取材でよく会っていた赤松良子さ
 んも、均等法を形にすることで相当
 苦労したことは、後に著した著作物
 などを拝見するとよくわかる。当時
 の労働大臣Oさんは「女性は外で働

いたりせず家庭にいるのが幸せ」という女性観の持ち主だけに、「議論は空回りで一向に前に進まなかった」と書いている。

とはいえ、当時、労働省を取材で訪れると多くの女性たちが建物の周囲を取り囲み、「赤松さん、頑張つて！」と拳を突き上げ、シユプレヒコールをしていた。そんな後押しもあって、均等法は成立する。

その成立に立ち会えたことは幸せだったが、徐々に私の関心は施行後に生じた新たな問題に移っていた。86年4月に同法は施行になるが、同年末、署名入りで次のような記事を書いていく。

「均等法の施行で」今後、能力ある女性は普通の男性にも差をつけ、エリート男性と肩を並べて仕事をすることははずだ。だが、職場の男女平等とは強者だけに居心地がよいことだったのか、女性が男性化することだったのか」

この文章は、「業界初の」といった形容詞で華やかな脚光を浴びたりした一握りの総合職女性を念頭に置いたものである。男女別の処遇ができなくなったので、均等法の施行前後から社員を総合職と一般職に振り分けるコース別雇用管理制度を導入する企業が増えるようになった。

経営者向けの冊子には、「コース別管理の考え方は、男・女の問題から出ている」という一文があったが、そうだとすれば同制度は男女別雇用を隠ぺいしたものと考えざるを得ない。

その後、「男性」対「女性」という対立の構図は「総合職女性」対「一般職女性」、さらに現在に至っては「正社員」対「非正社員」というように拡大かつ複雑化していったのである。

◆「偉くなりたかったら女を捨てろ」

記者生活の後半は管理職が長かったが、99年に編集局次長兼文化部長を卒業すると再びライターに戻った。同年は、男女共同参画社会基本法が制定施行になった年でもある。「均等処遇」の次は「共同参画」か、と思い、取材の比重を移していたが、こちらはなかなか厄介な側面があった。

2000年前半に男女平等に対する揺り戻し（バックラッシュ）の動きがあり、それらをいちいち紙面化するのには難しかった。男女共同参画という概念は、固定的性別役割分担の否定を奥底に秘める。それを読者に理解してもらうのは、当時はなかなか難しかったし、男女雇用機会均

等法も初期の議論ではその問題が浮上したが、いつの間にか立ち消えになった。

要するに「男は仕事、女は家庭でどが悪い？」という反応が当時は一般の大勢を占めるとまでは言えないにしろ、支持者はまだまだ多かったのである。

といって、それを脇に置いた記事では男女共同参画の理念を読者に正確に伝えることにはならない。「女性を書く」悩みを編集局次長のころ、同僚の局次長に話したら、こんなアドバイス(?)があった。

「お前ももつと偉くなりたかったら、女を捨てろ」

今もこの時のやり取りを思い浮かべるとつい吹き出してしまうのだが、結局、定年を迎えるまで、私は女を捨てなかった。

定年後は実践女子大からのお誘いがあったところに10年、古希を迎えて今年3月に退職したが、その後も一般財団法人女性労働協会の会長として女性活躍関連の事業やファミリースポーツ事業を推進するなど、相変わらず捨てることがしていない。5年ごとに見直しを行う国の男女共同参画基本計画の策定にも携わっている。

◆ようやく「女性活躍」が主流化

そして今は時代が変わり、「女性活躍」が国の政策の上位に位置づけられるようになった。「我が国の持続的成長を実現するには、最大の潜在力、女性の力の発揮が不可欠」などの政府公文書を読むにつけ、女性観なんてそんなに急に変わる?と思わないでもないが、本音はどうであれ、歓迎すべき時代の流れであることは間違いない。

新聞記者36年、大学教員10年、会長職半年と、計46・5年の職業人生の中で大半を女性問題に費やしたが、同時にそれは男性の生き方を問う男性問題でもあったと思つていく。取材の対象も知名度の高い大物ではなく、ごく普通の働く女性、男性たちであった。そうした中に、結納を終えた直後に海外での交通事故で若い命を散らした最愛の娘も入っている。

通夜の席で婚約者が呟いた言葉。「結婚したら家事を手伝うと言ったら、その考え方は家事は女の役目という発想。分担すると言いなさいと叱られました」

この話は、女を書き、政策を立案する上での原点になっている。

「放浪の画家ピロスマニ」と聞いても知る人は少なからう。ために百科事典、美術事典の類を探したが、その名は見当たらず、ようやく近刊の人名辞典に10行ほどの記述を見つけた。

概要、こうある。
 ①1862・5?②1918・4・7?グルジアの画家。美術教育は受



試写室 **放浪の画家 ピロスマニ**
 (11.2)

けず、チフリス(現トビリシ)で居酒屋などのために看板や絵を描きながら放浪。生活、歴史、自然に題材をとり、静的で量感のある人物・動物を描いた。素朴派の画家としてロシアで注目されたが貧しいまま死去。《百万本のバラ》の歌詞のモデル(岩波世界人名大辞典)

百万本のバラから加藤登紀子さん

「百万本のバラ」の清貧

だが驚くのは、この映画は実は半世紀ほど前の古い製作であるということだ。1969年グルジア(ジョージア)映画、ギオルギ・シエンゲラヤ監督、カラー87分。74年シカゴやイタリアの国際映画祭賞に輝き、78年日本公開時には文化庁芸術祭優秀賞。だからみた人はいる。しかし、みていない人、もう一度みたい人のために自らが絵本作家である岩波ホール勤務のHさんが引っ張り出してきた。ピロスマニにほれ抜いて新婚旅行にグルジアを選んだつわものだ。

なぜ今、再映なのか。Hさんのほれぶりは別として、みればこんな言葉を思い出す人もいるだろう。古言にいわく、濁富は常に憂い、清貧は常に楽しむ。日本人には無名でもジョージア人ならだれもが知る偉人の物語である。

東京新聞論説主幹 深田 実

東京・岩波ホールで上映中

美しい実話を脚色も加えて、さらに美しく描いた。感動と共感の仕掛けが満載である。

1890年、日本を親善訪問したオスマン帝国の軍艦エルトゥールル号は帰途、暴風雨に遭い、和歌山県の大島樫野崎で座礁し、機関が爆発して沈没する。死者は500人を超え、助かった乗員は69人。大勢の外



試写室 **海難1890**
 (11.6)
 日本・トルコ合作
 2つの実話が紡いだもの

国人が遭難するという、明治維新から20年余りの日本にとって経験のない事故だった。映画は、大島に住みついた医者とその娘を中心に、遭難したトルコ人将兵を地元民がいかにか手厚く救護したかを描いていく。

荒れた海に飛び込んで、沈みかけた士官を引き上げた青年。その士官

に心臓マッサージを施す医者や、遭難者の冷えた体を村人が裸になつて温め、漁に出られず食料に困るなか、最後の鶏まで焼いて食べさせるのだった。

上映時間の3分の2余りを過ぎたところで場面は1985年に切り替わる。イラン・イラク戦争下のテヘランである。

イラクが無差別攻撃を始める時間が迫るなか、日本は救援機を出せない。取り残された日本人居住者のためにトルコが旅客機を派遣する。空港で、自国の救援機に乗れずに不満を爆発させるトルコ人をトルコ大使館員が鎮める。群衆は日本人のために搭乗口への道を開ける。

試写会にはアフメト・ビュレント・メリチ駐日トルコ大使も出席して、あいさつした。安倍晋三首相とエルドアン大統領の全面支援でできた映画である。友情物語の背景には、それを利用したい政治の影もちらつく。

映画には出てこないが、この海難は勃興期にあった日本の新聞によって速報競争の嚆矢となり、義援金募集のイベントともなったという。美談はそうして消費されていく。

朝日新聞論説委員 真田 正明

©2015 Ertugrul Film Partners
 全国公開中

マイBOOK
マイPR

■謎と恐怖の楽園で

ミステリー批評55年

権田 萬治（日本新聞協会出身）

二足のワラジの集大成 『松本清張時代の闇を見つめた作家』(文藝春秋)を出してから6年。二足のワラジで続けていたミステリー批評も今年で55年になる。そろそろ(終活)の時期と考えると、これまで書いた現代ミステリー論、作家論、論争、対談、作品論、自筆年譜などをまとめて1冊してみた。

松本清張、佐野洋をはじめ最近の堂場瞬一など、新聞界出身の作家も多いが、ミステリーにご関心のある会員各位にもぜひ読んでいただきたいと願っている。



光文社 3240円

■日本兵捕虜はシルクロードに
オペラハウスを建てた

寫 信彦（毎日新聞出身）

ウズベキスタンに伝わる日本兵抑留の奇跡 私が日本ウズベキスタン協会を設立した1997年以降、10年以上にわたり取材、調査し、書いたノンフィクションである。

中央アジアの収容所で過ごした10代から30歳までの457人の日本人捕虜は、旧ソ連の4大オペラハウスの1つとなる「ナボイ劇場」をロシア革命30年にあたる47年に完成させた。よく知られた悲惨なシベリア抑留とは異なる波乱万丈の建設秘話で、完成時、ロシア人にもウズベク人にも感謝されたという特殊な胸温まる話である。66年のタシケント市を襲った大地震でもこの劇場だけはビクともせず親日の象徴となり、先日、安倍首相夫妻も訪れた。

若き日本の抑留者たちの労苦と協力・和の精神が中央アジア全体に多くの親日国を作ったことに繋がったことを知っていたとき、満州抑留兵のもう1つの秘話を広めてほしいと思っ

ている。



KADOKAWA 1728円

■働き場(Ba)革新

坪田 知己（日本経済新聞出身）

オフィス激変の時代 昨年6月、アマゾンから『サービス文明論』を電子出版した。私も参加している京都工芸繊維大学のオフィス研究グループが「おもてなしのオフィス」という研究をしていて、そこで本を作ることになり、『サービス文明論』の

あらましを第1部とした。効率優先の作業場だったオフィスが、「知的創造の場」として大変身を遂げつつある。「世界の先端企業に負けるな」という檄を飛ばした本である。事例紹介が豊富。マスコミ企業も見習うべきだ。



白揚社 2376円

■仮面の日米同盟

米外交機密文書が明かす真実

春名 幹男（共同通信出身）

米国は日本を守ってくれるか 8年前に「在日米軍は日本防衛のために駐留しているわけではない」と明記した米機密文書を発見した時は正直驚いた。あえて今、この古文書を紹介したのは、新しい「日米防衛協力のための指針」(ガイドライン)に作為的翻訳の事実が隠されていたからだ。実は、新安保法制で自衛隊の活動が拡大しても、米軍の日本防衛への関与は後退する。なぜか。

「沖縄返還」や「繊維交渉」、「ニクソン・シヨック」の秘話を紹介し、同盟の仮面をはがして、その理由を明らかにする。



文春新書 864円

■寄贈書

ザ・クロニクル 戦後日本の70年

細田 正和（共同通信デジタル推進局長）
14巻でたどる戦後ニッポン年代記



私たちはどこから来て、どこへ行くか?—ジャーナリズムに携わる者が忘れてはならない問いだろう。戦後70年の節目に足掛け2年にわたって刊行された写真集は、この問いを手放すことなく報道を続けてきた通信社の、中間報告といえる。

共同通信が所蔵する2000万枚もの報道写真から約5000枚を厳選、全国の加盟社の秘蔵写真も提供いただいで編纂された。「1945—49 廃墟からの出発」と「1960—64 熱気の中で」を昨年10月に刊行、今年10月の最終巻「2010—14 未来への選択」をもって完結した。戦火の焼け野原から重い膝を上げた私たちは、幾多の試練と高揚と哀楽を経て、再び大震災の惨禍から立ち上がろうとがいている。その歩みが、曲がりなりにも「平和史」としての70年であったことに、深く思いをはせたい。

(全14巻 各巻2700円 共同通信社)
*全巻をご寄贈いただきました。ラウンジの書棚にあります。ぜひご覧ください。

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■第4回日本医学ジャーナリスト協会賞 発表・授賞式・記念シンポジウム

今年度の受賞作が発表された。授賞式後は大熊由紀子・元朝日新聞論説委員の司会によるシンポジウムも行われた。受賞者は次のとおり。

<大賞>『新薬の罠 子宮頸がん、認知症…10兆円の闇』鳥集徹さん(ジャーナリスト)／NHK・ETV特集『薬禍の歳月～サリドマイド事件50年～』石原大史さん(NHKディレクター)／日経サイエンス「STAP細胞をめぐる一連の報道」古田彩さん(日本経済新聞社科学技術部次長)、詫摩雅子さん(日本科学未来館科学コミュニケーション専門主任)

<優秀賞>『認知症になった私が伝えたいこと』佐藤雅彦さん、『私の脳で起こったこと～レビー小体型認知症からの復活』樋口直美さん／TBS報道特集「精子提供・出自を知る権利、そして、新しい家族像をめぐる一連の番組」川畑恵美子さん(TBS報道局)(11.6 会見場)

■一般社団法人産業競争力懇談会 法人化披露パーティー

クラブの法人賛助会員として10月入会し、プレスセンター4階に事務所を構える産業競争力懇談会が、一般社団法人化とオフィス移転を記念してパーティーを開いた。甘利明・経済再生担当相、島尻安伊子・内閣府特命担当相らが参加した。(11.12 10階ホール)

■2015年度日本新聞協会賞 記者講演会

同賞受賞記者らが取材の舞台裏や苦労を語った。登壇者は高梨ゆき子・読売新聞医療部主任、大山文兄・産経新聞写真報道局ニュース担当部次長、松井慎央・信濃毎日新聞報道部次長、吉田好克・NHK社会部副部長。(11.13 10階ホール)

■緊急開催イベント「地方創生 第2ステージの処方箋」 主催：早稲田大学マニフェスト研究所

「横並び政策が通用した地方創生第1ステージは終わった」としたうえで、今後求められる、住民や企業などの「民力」を集結した地方創生第2ステージの処方箋を探ることをテーマに開催された。登壇者によるパネルディスカッション、政策提言に約200人が耳を傾けた。(11.17 10階ホール)

■新聞公正取引協議会 第15回会員総会 「日本新聞協会地域貢献大賞」表彰式

日本新聞協会は全国の新聞販売所や新聞販売同業者組合などが行っている地域活動を顕彰している。2015年の「地域貢献大賞」にはASAニュータウン西白井(千葉)の「主役は子どもたち ASA子ども元気塾!」が、「地域貢献特別賞」にはASA上新庄(大阪)の「『認知症サポーター』運動

日本記者クラブ賞・特別賞候補をご推薦ください

日本記者クラブ賞・特別賞の募集が始まりました。締め切りは来年1月30日(土)です。

■日本記者クラブ賞

取材、報道、評論活動などを通じてジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を顕彰します。会員および会員社に属する方々が対象です。クラブ会員であればどなたでも推薦できます。

■日本記者クラブ賞特別賞

2012年に新設された特別賞は、原則として会員以外のジャーナリズム活動を顕彰します。ただし、会員社の取材班・番組班などチームとしての業績も特別賞の対象となります。推薦はクラブ会員だけでなく、日本新聞協会および日本民間放送連盟加盟社に属する方であればどなたでもできます。

*

両賞とも、推薦者は所定の用紙で、推薦理由(2000字以内)と参考資料を添えて提出願います。推薦書はクラブのウェブサイトからもダウンロードできます。

詳細は事務局の本庄(03-3503-2754)へお問い合わせください。

とその普及」が選ばれた。このほか北海道新聞札幌鉄北・中田販売所、熊本日日新聞宮原販売センターなど19件が地域貢献賞を受賞した。(11.19 10階ホール)

■「朴裕河氏の起訴に対する抗議声明」 発表会見

『帝国の慰安婦』の著者である朴裕河さんがソウル東部地検から名誉毀損罪で在宅起訴されたのを受け、「学問・言論の自由」を奪う行為だと深く憂慮する立場から、日米の学者やジャーナリストを中心に有志54人が抗議声明を出した。上野千鶴子、小森陽一、若宮啓文の各氏らが会見して声明文を発表した。(11.26 会見場)

■世界人口白書2015 記者発表会

12月3日の「世界人口白書2015」世界同時発表に向け、記者会見が行われた。今年「『嵐』から身を守る～危機にさらされている世界に住む女性と少女のための革新的計画～」をテーマに作成された。今回の白書では、第2次世界大戦以降最多となる1億人以上が人道的援助を必要とするなか、その4分の1が15～49歳の女性であることを踏まえ、彼女らのニーズを満たし権利を保障するための行動を呼びかけている。(11.30 会見場)

■放送人政治懇話会

テレビ・ラジオ局の現役・OBらによる勉強会。山下芳生・共産党書記局長(11.4)、伊吹文明・元衆院議長(11.11)、馬淵澄夫・民主党副幹事長(11.18)をゲストに招いた。

レストラン *価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 師走懐石(12/28まで)

前菜：穴子小袖寿司、ふぐ煮ごり お椀：玉子豆腐 海老葛打ち お造り：三点盛り 焼物：鯛照り焼き 煮物：海老芋 蟹黄味煮 揚物：ふぐ唐揚げ 食事：稲庭うどん 水菓子：季節の果物 グラス冷酒付き(5,400円) (板長：大井由光)

洋食 いのしし肉のシチューコース(12/28まで)

ズワイガニ肉のサラダ仕立て、オイスターチャウダーまたはポタージュ、丹波篠山産いのしし類首肉のシチュー 温野菜添え、チョコレートナッツサンデー、パン、コーヒー付き(3,780円)。ランチ、ディナー(土曜日はランチのみ9階レストラン)ともにご利用いただけます。(シェフ：黒須修一)

ふぐ懐石をご利用ください 1月29日(金)まで

好評の「ふぐ懐石」コース(5,940円)を提供しています。刺身、唐揚げ、鍋などふぐづくしの懐石をお楽しみください。予約(03-3503-2723)をお願いいたします。

忘年会、新年会は個室で 1月30日(土)まで

年末年始の会合にお使いいただけるプランを用意しています。洋食8品と寿司、そばで一人3,240円、2時間の飲み放題(1,404円)にすることもできます(別途、部屋代)。ご予約は03-3503-2724へ。

年末年始 閉室のお知らせ

レストラン、ラウンジの年内営業は12月28日(月)までです。事務局も12月29日(火)から1月3日(日)まで閉室いたします。新年は1月4日(月)から、事務局、ラウンジ、レストランとも平常どおりオープンいたします。

HP更新情報 <http://www.jnpc.or.jp/>

■ 会見詳録 会見の全文文字記録版

- 昼食会・記者会見「デジタルとモバイルの世界への移行」マーク・トンプソン・ニューヨーク・タイムズ社長兼最高経営責任者(日本語・英語)(2015.9.25)
- 研究会「リセット 東京五輪」①「五輪エンブレム問題と著作権」福井健策・弁護士(2015.9.28)

■ 音声アーカイブ(日付は会見日) 重要会見の音声録音

- 金泳三・韓国統一民主党総裁(1989.2.1)
- 6党党首討論会(2009.8.17)
- 9党党首に聞く(2010.6.22)
- 11党党首討論会(2012.11.30)
- 9党党首討論会(2013.7.3)

*「音声アーカイブ」へは、クラブウェブサイトのトップページからアクセスできます。

クラブの電話 ダイヤルイン

- 和食レストラン(9階) ☎3503-2723
- 洋食レストラン(10階) ☎3503-2766
- 貸室予約・宴会打ち合わせ ☎3503-2724
- 受付 ☎3503-2721
- 会員事務 ☎3503-2727
- 経 理 ☎3503-2728
- クラブ行事への申し込み ☎3503-2722
- 会見申し込みアドレス kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

- 法人会員：135社 ● 基本会員：745人 ● 個人会員：1,352人
- 法人・個人賛助会員：64社・142人 ● 特別賛助会員：100人
- 名誉・功労会員：12人 ● 学生会員：155人
- 計：199社・2,506人

2016年の日本は？ 経済見通し研究会

年初恒例の「経済見通し研究会」を2016年も開催します。おなじみのエコノミストから初登場のゲストまで、さまざまな側面からお話をうかがえます。会見予定とテーマは以下のとおりです(12月3日現在)。会場はいずれも10階ホールです。

■ 1月13日(水) 15:00～16:30

早川英男・富士通総研経済研究所エグゼクティブ・フェロー：日本経済全体の先行き、金融政策の在り方

■ 1月18日(月) 13:30～15:00

渡辺博史・国際協力銀行総裁：世界経済の行方

■ 1月18日(月) 15:30～17:00

武者陵司・武者リサーチ代表：市場からみた日本、世界経済

■ 1月20日(水) 15:00～16:30

藻谷浩介・日本総合研究所主席研究員：地方経済を診る—現状と行方

■ 1月22日(金) 15:30～17:00

山口義行・立教大学経済学部教授：中小企業の動向、「草の根」の視点からみた日本経済

■ 2月5日(金) 13:30～15:00

武田洋子・三菱総合研究所政策・経済研究センター副センター長：日本経済と世界経済の行方

会員名簿をお送りしました

12月1日現在の「会員名簿」を作成し、12月初旬に発送しました。お手元に届いていない方や、落丁・乱丁など不備があった方は、事務局の青山(03-3503-2727)までご連絡ください。

<法人会員代表変更>

東奥日報社 蛭名克律・取締役東京支社長(旧・鳴海成二)

<訃報>

饗庭孝典会員(NHK出身、81歳)が10月1日、杉野直道会員(テレビ東京出身、85歳)が11月5日、石井彰会員(NHK出身、80歳)が同13日、死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

12月の行事予定(12/3現在)

11 ^金	14:00～15:00 10階ホール 記者会見 石毛博行・JETRO理事長
	13:00～14:30 9階会見場 記者会見 福井健策・弁護士
15 ^水	15:00～16:30 9階会見場 戦後70年 語る・問う④ 中島岳志・北海道大学准教授

会報委員会

- 委員長＝飯塚 浩彦
- 委員＝稲沢 裕子 大寺 廣幸 佐塚 正樹
- 鈴木 仁 高橋 茂 長崎 和夫
- 藤井 良広 藤澤 秀敏 向山 明生
- 渡辺 大祐

(事務局：長谷川和子 村田 茜)

☎03-3503-2752 FAX 03-3503-7271

撮影：望月 亮一（毎日新聞写真映像報道センター）



思い思いの仮装で＝東京・渋谷駅前、10月31日

お疲れ、2015年

ハロウィーンの夜に、コスプレではじけた彼女たちの中にも、手当て済みの女子がいたはずだ。来年の成人式用晴れ着商戦は、とうにヤマを越している。振り袖姿のモデルが、こう叫ぶ奇抜なテレビCMに驚いたのは、まだ暑いころだった。

「お疲れ、10代。待ってる、ハタチ！」
日常のあいさつで、「疲れたと思われる人を敬い、気遣って言うあいさつの言葉」（日本国語大辞典）の「お疲れ（様）」がシェアを伸ばしている。

若い人からもらうメールの書き出しに「お疲れ様です」が普通になった。コスプレ女子たちも、職場で連発しているのだろう。あいさつされる側の希望を言えば、夕方、いや、せめて午後にしてほしい。朝からだともまだ疲れていません」と返したくなる。

物議をかもした栄養ドリンクのCMをご記憶だろうか。桃井かおりさんが、けだるそうに「世の中、バカが多くて疲れませんか？」とつぶやいたのだが、クレームが殺到して早々にお蔵入りした。何とも疲れる顛末だったが、調べてみると1991年、バブル崩壊不況が始まった年の作だ。

以来、日本経済の「失われた」年月が続き、もがいても成果につながらぬ疲労感が、社会に澱のよう（お）に溜まっているのかもしれない。そこで「お疲れ」が……とは、私の無責任な仮説である。

慢性化した停滞を断ち切ろうと、3本の矢を放ったアベノミクスが、失速気味である。そこで新たな3本の矢を持ち出し、束ねて「1億総活躍社会」。このネーミング、疲れませんか？

（土谷 英夫）